

生の事さへ父母兄弟妻子眷屬の間でさへ思ふやうに行かぬ者が
未來惡趣に沈んでゐるものを救ふなんて圖太い考へを如何して
持てやうぞ。

聖道の慈悲と云ふはものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり、
しかれども思ふが如く助けとぐることはめてありがたし
どは飾を外して眞裸かにした人間の値である、だから、

念佛申すのみぞ末通りたる大慈悲心にて候べきと云々。

と第四章の終りに喝破せられた、聖道の慈悲は末通らぬ慈悲であ
る、自力の慈悲は如何程盡したからとて、これ丈け行ふたらば救は
るゝと云ふことを定められぬ、恰も底なき桶に水を汲み込む如う
なが聖道の慈悲だ、自力の慈悲は分量の上にも、時間の上にも、對象
の上にも限りあることない、斯ることは凡夫の能く堪ふる所では

ない。又葬儀や法事年回に見ても、私は公私幾千回のそれらの式
に遇ふたが、祭る人と祭らるゝ人との精神的に一致したのを見た
ことは甚だ稀である、都會の富豪が最愛の妻を亡くし、最愛の夫に
別れた時には、實に心中には如何程夫を思ひ妻を慕ふの情の切な
るも、平日に道徳的修養も宗教的修養も積んでなきたため、夫のため
妻のためと思ひ誠を盡した心算で行ふ葬儀が、大金も費やし辛勞
もし混雜もしながら、神は泣き佛は泣き死者も泣くが如き葬儀と
なつて了ふことが多い、翻つて死者の喜ぶやうな私の死んだ爲に
家内の者もかく迄心得が變りたかと云つて喜ぶやうなのは認め
られぬ。金と名譽との爲に心も惑ひ、倫理的宗教的精神の暗黒
なことを遺憾なく發表する葬儀と評したならば、近來の葬儀を全
く評し盡したものと云へやう。

茲に私が先年陸軍に居ります時に父は日清戦役に歿せられ、母は二人の青年を抱いて泣く、その時二人の息子は御母さまさう泣かないで下さい、私共二人が軍人となりて父に代りて陛下につかへますと泣く母を慰めて葬儀を行ふたが明治二十七年の事。所が兄の青年は榮進して大尉となり、弟は少尉に任せられ、郷里に歸りて母子三人集りて父の年回を營む折柄、弟は腸窒扶斯を患ふ、法事を済まして母の止むるのも聞かず任地に歸る旅中病は重りて師團に着くや否や衛戍病院の傳染病室に入る、一週日で危篤に迫り、母と兄大尉とに打電した、翌日夕方兄大尉は病院に着く、少尉は既に人事不省兄！……兄！……の一言に眼を開き、兄の顔を見るなり「兄さん三人前の忠義を頼む」と一言最後の言葉であつた、私は最う死ぬ父と兄と私との三人前の忠義を兄に頼むの遺言ととも

に逝かれた、翌日傳染病のために直ちに火葬に付し白骨として葬儀を行ふた、その時兩側に聯隊の將校、後方は中隊の兵卒、先づ焼香讀經に移る、兄大尉は喪主として棺前に進みて焼香し、三步後に退き直立した儘動かぬ、その内に全身慄ひ出し、將校兵卒一同涙に暮るゝ、私も胸せまり情動き御經を讀むさへ堪へられぬ、兄大尉位牌に向ひ、弟、弟三人前の忠義を引き受けたぞ、その一語、天地神明佛陀に通じ、弟少尉の位牌も遺骨も動いたとばかりに思はれた。これ位葬儀らしい葬儀、今日迄幾千回の葬儀中最も心を動された事はない、それには花もなく飾りもなく、白布に纏ふた遺骨と白木の位牌と香爐に薫する御香と、哀れに燃ゆる蠟燭の光りのみであつた、然し乍ら經を讀んでゐる僧侶も泣き、會葬者一人として泣かぬものはなかつた。當時の聯隊長や中佐少佐は今は皆陸軍將官にな

つて居られ、中には滿洲で戦死した方もある。然るに世間の追弔會や法事年回や葬儀には直ちに死者に對する敬虔の情はなく、その祭主も御馳走や御菓子心配ばかりして居つて、却て其日に精神を亂すことも多い、これでは何の意味をもなさない。

石川五右衛門も釜の中で、初めの間は子を差上げてゐたが、熱くなつた時には釜底に子供を敷いた。火事の呼鐘に眼を醒ましても河向ふと云ふと、又眠られるこの心川を挟んだ兩方の村民が、大水で堤の切れた時、こちらの堤でなくて幸ひと喜ぶこの心暴風雨や旱魃や不作の時、先づこの邊でなくて安心と落ちつくこの心、これが實際の我等の心情である。祖師聖人は、

小慈小悲もなき身にて
有情利益はおもふまじ

あやまり
果てずば
濟まぬ

如來の願船いまさずば

苦海をいかでかわたるべき

今生にて如何にいとおし不便と思ふとも、存知の如く助け難ければこの慈悲始終なしと『歎異鈔』の御味はひは實際の御言葉である、この實感より聖人は「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念佛申したること未だ候はず」と仰せられたのである、殊に『口傳鈔』には、

鸞聖人東國に御經廻の時、御風氣とて三日三夜ひきかつぎて、水漿不通しますことありき、つねの時の如く、御腰膝をうたせらるゝこともなし、御煎物などいふこともなし、御看病の人も近くよせらるゝこともなし、三箇日とまふすとき、噫、今はさてあらんと仰ごとありて、御起居御平復もとの如し、そのと

き惠信の御房尋ねまふされていはく、御風氣とて兩三日御寢の處に、今はさてあらんと仰ごあること何事ぞやと、聖人示しまし、ての給く、我此三箇年のあいだ浄土の三部經を讀むことを怠らす、おなじくは千部讀まばやと思ひて、これをはじむる處、また思ふやう、自信教人信難中轉更難とみゑたれば、自らも信じ、人をも教へても信せしむるほかは、なにのつとめかあらんに、この三部經の部數をつむこと、我ながら心得られずと思ひとりて、このことをよく、案じさだめん料に、そのあひだは、ひきかつきて臥しぬ、常の病にあらざるほどに、今はさてあらんといひつるなりと、仰ごとありき。

とあるが、これによりて見るも、參らせ心にては念佛唱へることも、御經讀むことも嫌はせられてある、すれば、死んだ人に對しては如何にするど善いかと云ふに、本鈔には第四章に、
浄土の慈悲と云ふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、思ふが如く衆生を利益するを云ふべきなり。
なほ第五章には、

いづれも、この順次生に佛になりて助け候ふべきなり。
いそぎ浄土のさとりをひらきなば六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)四生(胎卵、濕、化生)のあいだの何れの業苦に沈めりとも神通方便をもて有縁を度すべきなり。
とある、これが浄土眞宗他力義に於ける追弔の眞精神である、それ故追弔會には、第四章の終りに、
しかれば念佛まふすのみぞ末とほりたる大慈悲にて候ふべきと云々。

自力をす
て、自力
以上の行
を勤む

また第五章には、

たゞ自力をすて、急ぎ浄土のさとりを開きなば。

とありて、早く御浄土参り出来るやうに信心を頂くのが追弔會の眞の御馳走になると思ふ。假令聖道門の方から云ふても、今時の葬儀や法事の派手な勤め方は感心出来ない、それよりは親の年回子の年回なりに親類兄弟が集りて、しみん、と佛の教を聴聞して、我身々々の日々の生活の淺間敷さを懺悔して、夢や幻に暮してゐる私共によくもこの世の果敢なさ、この世の頼み方ない事から、後生の大切なることを知らしてくれたよと、其恩を感じて如來の御慈悲を喜ぶ方が奥床しいと思ふ。又死んだ人に取りても、自分の事を思ふて今日集つて、日頃の重つた罪を懺悔して、御慈悲を喜んでくれる姿を見られたなら、嘸嬉しいことであらう。夫に就て私の平

日いつも考へてゐることを便に乗じて話したいのは、浄土眞宗には如何に立派な日暮しをした者でも、存命中に信仰なくば佛にはなつて居られぬ、世間の倫理教でも教への如くには行はれて居らぬ、之は自分の反省によると分る、又世間を見ても實例はある、倫理から云ふと、人の噂をするのも、他人の缺點に氣づくのも、最早罪である、破倫である、古人の語に、人の美點にのみ氣づく人は善人なるも、人の缺點にのみ氣づく人は悪人も云ふてある、眞に行爲と良心とを照らし合はす時、不徳不義、漢たるを免るゝ者はない、故にかゝる心事と、かゝる行作との者が自力で佛にならうなぞは及びもつかぬ、それで生前に他力信仰のあつたものゝみ佛となつてゐて、他は總て惡道で苦しんでゐる、だから地獄に墮ちて苦しんでゐる人は随分多いのであるが、獨りで苦しむのが辛い故、仲間と一處

に苦しみたいから、生前に人に悪事をなして来いと云ふかと思ふに、さうではない、私は彼の罪囚人が監獄を出た時、又は牢で死ぬ時、世人に遺した言葉を集めたものを見たが、我は酒と女との爲にかなれり、世の若者よ、酒と女とに觸るゝ勿れと云ふ風な詞が多くあつたのに氣付いた、之から見ても、死んで地獄で苦しんでゐる人も、自分の辛さから、毎日毎晩人間界に向つて血の涙で聲を擧げて、「世の人よ、佛法を大切にして、如來の慈悲を喜んでくれ」と叫んでゐるはせぬかと思ふ、果して然らばかゝる人に對しても、信仰を得るのが、其儘に厚意に酬ゆることゝなりて、死者に對する御馳走であらうと考へる。それから水に溺れた者を救ふには、水泳を知つて波間を自由自在に働ける人でなくてはならぬ、生死の大海に溺惑してゐる凡夫を救ふには、迷ひの生死海の水上に自由の利くもので

佛になつてこそ他を利するなり

なくてはならぬ、然るに生死海の上に自在を獲得した方は、唯佛のみである、故に死んだ父母兄弟眷屬を救ふには、どうしても自ら佛とならねばならぬ、所が聖道の法では何時成佛するか覺束ない、他力淨土の法では、只今現在信心を得させて頂けば、今晚命終つても直ぐ佛にして頂けるから、今生から救はうと力んでゐる聖道門よりも、未來世直ちに佛となりて救ふ方が、却つて早くて確かである、何を申すも、一刻も早く信心決定して往生即成佛の果を得させて頂き、その上で自由自在に三惡道に沈んでゐる者を救ふとである。又生前に信仰のあつた人は、必ず極樂に參つてゐるに違ひない、處が極樂と云ふ所は、眼に見る者、耳に聞く者、口に食する者、身に着ける者、皆樂しみづくめであるから、我々の手向ける何物をも要し給はぬのみならず、天眼通が備りて、娑婆が見え、他心通が叶ふて人

の心が分かるから我々の生活を見給ふと刃の上を網渡りし地雷火の上に眠つてゐるのと同じと思召すであらう、たゞこの御心を休めるには我々の未來の安心をさせて頂き、信仰生活をなすことになれば、何よりも喜んで下さる、仍で追弔會の最第一の手向けは信心決得である、つまり死んだ人が地獄に墮ちてゐやうと、極樂に參つて居やうと、何れにしても信仰を頂きさへすれば、その心を休め奉ることが出来、追弔の第一義に契ふのである。

それならば、信心さへ頂戴すると、年忌佛事に御經を讀誦しなくとも善いかと思ふ人もあらう、けれどもさうではない、矢張讀むのは讀むのであるが、讀む心持が大變な差である、その今の讀經の心持ちを云ふと、蓮如上人の『御一代聞書』に、

一、十月二十八日の逮夜にの曰く、正信偈和讃をよみて佛にも聖

人にも、まゐらせんと思ふがあさましや、他宗には勤めをもして廻向するなり、御一流には他力信心をよく知れと思召て、聖人の和讃にその心をあそばされたり、こゝに七高僧の御懇なる御釋のこゝろを和讃に聞きつくるやうに遊ばされて、その恩をよくノノ存知してあらうとやと念佛するは佛恩の御ことを聖人の御前にて喜び申す心なりと、くれ〜仰せられ候ひき。

とあり、又、

正信偈和讃は衆生の彌陀如來を一念にたのみまいらせて、往生助かり申せとのことわりを遊ばされたり、よくきゝわけて信心をとりて、ありがたや〜と聖人の御前にて喜ぶことなりと、くれ〜仰せ候ひき。

とありて、参らすための御勤めでない、その御前にてあゝ有難やと喜ぶ有様を見られたらば、嘸先き立ちし人も嬉しいことであらうと思はるゝ故、参らせ心よりも却つて奥床しい有難さを感じますから、かくも御話せし所宜く意を酌みて第四第五章を味はれたならば追弔の眞義が教へらるゝと思ふ。而して我々は自己の行爲が少しも囚れて居らぬやうになつて、始めて隔てなき生活従つて歡喜の生活をわられるのである。故に又深く自己を省みて、放たれた生活の裡に、その放たるゝ所以を感得せねばならぬ。その眞趣がこの二章によつて顯れてゐるのであります。返すく自己を徹見したまひし如來の慧眼に服し、その所謂救ひたまふの誓願の御心をいたゞいて貰はねばならぬのであります。

第七講

第六章

一 專修念佛ノトモガラノ、ワガ弟子、ヒトノ弟子トイフ相論ノサ
 フラウランコト、モテノホカノ仔細ナリ、親鸞ハ弟子一人モモ
 タズサフラウ、ソノユヘハ、ワガハカラヒニテ、ヒトニ念佛ヲマ
 フサセサフラハ、コソ、弟子ニテモサフラハメ彌陀ノ御モヨ
 ホシニアツカリテ、念佛マフシサフラウヒトラ、ワガ弟子トマ
 フスコト、キハメタル荒涼ノコトナリ、ツクベキ縁アレバトモ
 ナヒ、ハナルベキ縁アレハ、ハナル、コトノアルヲモ、師ヲソム
 キテ、ヒトニツレテ念佛スレバ、往生スベカラザルモノナリナ
 ントイフコト、不可説ナリ、如來ヨリタマハリタル信心ヲ、ワガ

モノカホニ、トリカヘサントマフスニヤ、カヘスカヘスモアル
ベカラザルコトナリ、自然ノコトハリニアヒカナハ、佛恩ヲ
モシリ、マタ師ノ恩ヲモシルヘキナリト云云。

本章は前九章即ち祖師聖人の直々の御言葉の中に現はれてゐる異解である、『口傳鈔』の上巻には常陸國新堤の信樂房が異義を唱へて弟子はなれをせられた時に御弟子の蓮位房が、

信樂房の御門弟の儀をはなれて下國の上は、あづけ渡さるゝ
ところの本尊聖教をめしかへさるべく候らんと就中に釋親
鸞と外題のしたにあそばされたる聖教多し、御門下をはなれ
たてまつる上は定めて、仰崇の儀なからん歟。

と申し上げられたるに聖人は、

本尊聖教を取り返へす事甚だ然るべからざることなり、その

ゆへは親鸞は弟子一人も持たず、なにごとを教へて弟子といふべきぞや、みな如來の御弟子なれば、みな共に同行なり、念佛往生の信心をうることは釋迦彌陀二尊の御方便として發起すとみへたれば、たまく親鸞がさづけたるにあらず、當世たがひに違逆のとき、本尊聖教をとり返へすなどいふこと國中に繁昌すと云云かへすゝしかるべからず。

とあるが、聖人御存生の當時既に斯くの如く異解が行はれて居たこと、思ふ又『改邪鈔』にも、つかうがはなれやうが自分の弟子と思へばこそ左様なる事もあれど、弟子でない限り、かゝる争ひの起るべき筈なしと云ふを仰せられたのに、

某はまたく弟子一人ももたず、そのゆへは彌陀の本願をたもたしむるほかは、なにごとををしへてか弟子と號せん、彌陀の

本願は佛智他力のさづけたまふところなり、しかればみなどもの同行なり、わたくしの弟子にあらずと云云。

こゝにも聖人御在世當時の争ひが窺はれる、第三代覺如上人の時代に矢張この争ひが世間には行はれたものと見えて、『口傳鈔』『改邪鈔』にこれを掲げさせられたものと見ゆる、それから第八代蓮如上人當時にも矢張りこの争ひが絶えなかつたものと見えて御文章の一帖目第一通にこのことを御述べになつてあるが、滅後六百五十年の今日も、矢張りこのことが行はれてゐる、僧侶がこれを争ふのは僧侶が如來の本願をわが物に思ふてゐるからである、如來の本願は如來のもので我が物ではない、丁度我はげむ善にても候は、こそ念佛を廻向してといふこともあらうと仰せられてあるのと同じく、我が助くる未來なれば弟子と云ふことも候はめ

本願は如來のものなり

他力の信者皆同胞なり

である、如來の助くる佛の催して御助けに預る未來を共に喜ばして頂く御同朋御同行であつて、師弟の關係ではない、それ故弟子はない筈である、弟子のない所に弟子争ひの起る筈がない、仍で本章には、

一、專修念佛のともがら、わが弟子ひとりの弟子といふ相論のさふらうらんこと、もてのほかの仔細なり、親鸞は弟子一人もまたす候、その故はわがはからひにて、人に念佛を申させ候は、こそ、弟子にても候はめ、ひとへに彌陀の御催しにあづかりて念佛申し候ふ人を、わが弟子と申すときは、はめたる荒涼のことなり。

と仰せられてあるが、淨土眞宗は徹頭徹尾如來の御獨り働きで、私を少しも加へぬのが宗の立場である、然るに斯様のことの起るの

二百八
はその立場を忘れたる荒涼のことである。荒涼は遠慮せぬこと、會釋樹酌せぬことで實に亂暴な話である。祖師聖人は實に此點に關しては寛大である。

つくべき縁あればともなひ、離るべき縁あればはなるゝとあるを師をそむきて、人につれて念佛すれば往生すべからざるものなり、なんと云ふと不可説なり、如來よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんと申すにや、かへすゝもあるべからざる事なり、自然のことわりにあひかなはば佛恩をも知り、また師の恩をも知るべきなりと云々。

因縁因果は一般佛教の一大要素をなしてゐるので、佛陀にも三不能ありて因縁なきものを如何ともし難い、即ち縁なき衆生は度し難しとはこれを云ふのである。御當流にも無宿善の機の前に法

を説いても謗法の因縁とはなるも信仰の因縁とはならぬから、無宿善宿善を考へねば説法出來ぬとは、蓮如上人の御誠めである。近時各宗各派共に新舊兩派が分れて互に衝突するやうであるが、大體宗教の團體は信仰を中心として成立してゐるのであるから、信心の同一なるものゝみ共に集つて喜ぶので、氣に食はぬものは、又其物同志集つて喜ぶが可い、選舉にせよ、指命にせよ、任期があり或期間、宗政機關に一時任するものならば、兎も角も、さうでない限りは會社に對する一私人のやうなもので、番頭や店員の意見で動かすべきものでない、主人の意見に従ふて行くもの、杖を使用して主人の意見を發展させるのと同じく、本願寺杯の僧侶や門徒は本願寺の意見に従ふて來るもの、杖で組織せられてゐるので、逃げたからとて追ふことも、又逃さぬと云つて拒むことも出來ぬ如く、伴

ひ集つた人で行つてゆくのである。國家も亦宗教は宗教元來の性質を認めて我々に對して憲法上信教の自由を保障してゐる。思へば心細くもあるが心のはだくな鳥合の衆よりも寧ろ意氣相投じ、心の一致したものの團體であつたならば、縱令數は少くても又云ふべからざる愉快を覺ゆる、噂さの改革運動も我玉を磨く他山の石たるであらう、眞に如來の御手廻はしかも分らぬ實は私は本鈔第十八章の、

火宅無常の世界はよろづのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにておはします云々。

この御言葉を幾度も繰り返して味は、させて頂いてゐます。裏へ廻りて暗黒方面の調査をする時間に、表に顯はれて光明の方面

に御手傳ひをさせて頂き、一人にても信仰の人の出来るやうに力めたい、切言すると、人の暗黒裏面を探すよりも自分の方が餘程暗黒であるのである、それを思ふと戰慄寒心に耐へぬのである、しかもかゝる我もこの儘救はるゝ如來の慈悲を仰ぐと勿體なくも難有い次第である。私は明治三十二年一月に佛教大學を出たが、丁度七月十五日卒業證書授與式が行はれ、同日の午後寄宿舎から旅館に引き取り夕餐をすませて、あたりを散歩してゐる中に、いつの間にか大學の門前に來て恍惚としてゐる、昨夜迄南北兩寮には幾百の燈光もあり、幾多の學生も居たのに、今宵は燈の影もなく一人の聲もしない、校庭の銀杏樹や光明天皇の御代に御愛寵の鶴が來て泊つたと云ふ歴史を語る、老松の上から寄宿舎を照らす月の光りも、今日は一入に淋しい、思はず鐵門の石疊みの上に五體を投じ

て、講堂の如來様に對して泣き伏し、在學中は校規を亂し、師命に背き、學校中での亂暴者をよくもく、四ヶ年間も面倒を見て下さつた、何卒在學中の罪を許して下されと謝した、今日多少の法門を辨へ華天唯識俱舍の法相を知らせて頂いたのは、學校先生の賜物であると感じ銘して泣いた、私を育て、下された先生は大部分物故せられた。足利和上は第一の恩師である、京都へ參る度毎に訪れて一口の法話を聴くのが無上の樂みであつたが、今は之も追憶の悲しみとなつた。今も學校に残つて居らるゝ師匠は熱田和上のみである、私は熱田靈知師を見ると九歳で別れた母や二十三歳で別れた父の事を思ひ出し、幾度か涙を以て師恩を思ひ浮べたか分らぬ、在學中の罪を謝したか分らぬ。然し乍ら四ヶ年間に於ける事務員や講師方は皆眞俗完備で立派な方缺點がないかと云ふと、仲

々然うにも限らぬ、それで私は在學中謀友者でその缺點のみに著眼してゐたが、學校を出た夜分、濟まぬことに日を暮してゐた、大きな御蔭を忘れてゐたと始めて目がさめた、その後私は今の本願寺に使へて居る、中には悪い處もあらう、よくない人も居るに違ひない。然し乍ら悪い點もあると同時に善い點も澤山にある、私はその善い方に奉公をしてゐる、長所を見て楽しんでゐる。成る可くは足利の身方となるよりは楠氏の黨となりたい、多勢の北朝に走らんよりは、天下隠れ家もないと歎せられた後醍醐天皇の方に参りたい。日露戦役の最後の國民大會や日比谷公園や警察焼打の御伴に出懸けるよりは、遙に明治天皇の大御心を拜察して、天皇の進ませたまふ所なれば、火の中をも辭せぬが、天皇の忍ばせ給ふ所を共に忍び奉らんと、時局に對しては一言を吐かず、日露戦役に勝

つたのは忠君愛國の念の強かつた賜物であるから、此度に照らして將來を戒めやうと決し、忠君愛國の鼓吹を一心に力めた、これが私の心事である。同じたはごと、そらごと、誠なき世の中になまことの念佛丈を弘めたい、念佛が六百年間弘通せられたのは本山の御蔭である、私共はこの點に報わねばならぬ、『邪改鈔』には、

たゞちに凡形の知識をおさへて如來の色相と眼見せよとす
ゝむること聖教の施説を離れ、祖師の口傳にそむけり、本尊を
はなれていくの程より知識は出現せるぞや、荒涼なり、鬚鬚
なり。

と善知識を如來の色相の如く神聖視するを否定し玉ひ、更に、

たゞ實語をつたへて口授し佛智をあらはして決得せしむる
恩徳は生身の如來にもあひかはらず、木像もの云はず、經典く

ちなければ、つたへきかしむるところの恩徳を耳にたくはへ
ん行者は、謝徳のおもひを専らにして、如來の代官とあふいて、
あがむべきにてこそあれ。

と仰せられ、本鈔十六章にも、

信心定まりなば往生は彌陀にはからはれまひらせてするこ
となれば、わがはからひなるべからず、わろからんにつけても、
いよく、願力を仰ぎまひらせば、自然のことはりにて柔和忍
辱の心もいでくべし、すべてよろづのことにつけて、往生には
賢き思を具せずして、たゞほれんと彌陀の御恩の深重なる
こと、つねにおもひいたしまひらすべし。

とあり、更に信樂房が若し本尊聖教を弟子はなれをせし爲に野山
に捨てなば、勿體なきことではなきかと云ふに對して、『口傳鈔』に

たとひかの聖教を山野にすつといふとも、そのところの有情群類、かの聖教にすくはれて、ことごとくその益をうべし、しからば衆生利益の本懐、そのとき満足すべし。

我等は多生の慈育を被る者なり

と實に廣大深重の思召と云ふべし、我等久遠劫來の凡夫を、今日佛恩を知らせて頂く迄には堪へ難き永き間堪へさせられてはぐくみ給ひたのである。多生曠劫この世まで、あはれみかふれるこの身なりと知らせて頂けば、過去も未來もたゞ願力の光明ばかりである。この尊き願力の功能にもよほされて皆々信を獲させていたゞいたのである。如何に我慢がつよくとも奪つて「我が弟子」と云ふやうなことは申されませぬ。それを矢張り他力に徹底せないもの故均しく真宗であり乍ら十派にも分れて居る爲に、派と派との競争をこれ事とし、醜狀を世に暴露し邪見に陥り、第三者をして嘔

佛見のための教訓

吐を催さしむること多し、せめての事にこの宗教改革氣運に際し、真宗十派丈でも連絡して教育機關と布教方法を聯合事業とせば、學校も完全になり經費も節減せられはせぬかと思はるゝが、要はこの宗派感情程忌まはしきことはない。故網島梁川氏の寸光録を讀みて大に感じたことであるが、基督教界にもこの誠あれば、二三を示して教訓と致したい。

その一。猶太人の祖アブラハムは旅人を懇ろにした人であるが、或日百歳ばかりの老人が夕方に来たから、これを迎へて旅の疲れを勞はり、晚餐を出した時旅人は食前に禱りを捧げなかつたから、其理由を尋ねたら、我は火教の信者であると云ふ、この時アブラハム怒り追ひ出したが、エホバの神現はれて、その老人を問ふ、アブラハムは實を答へた。すると、汝はさても氣の短かい者である、彼

は昔から我を尊ばざるも我は彼は生かして置いたと論したので、

ア●ブ●ラ●ハ●ム●も恥ぢて追跡して連れ戻り待遇したといふ。

その二。キ●ヤ●ビ●テ●ン●ゴ●ル●ド●ン●氏曰く組織せられた教會は生命の大河から引き來つた水を以て、靈なる教會に供給する特權つきの水道會社の如うである、けれども若しこの會社にして、或は天降り來る雨を防ぐの權利あると爲して、或は某地方、又は某市街の人民に對して、爾曹は我築造した水道會社を通じて來た水の外、一滴の水をも決して有することは出來ぬと云つたならば、皆は狂暴と云つて笑ふであらう。

その三。第一講でメリヂスト教會開祖の夢物語を云ふたが、あれもまた、こゝに味ふべき類である。

その四。ド●ク●ト●ル●カ●ン●ミ●ン●グ●氏曰く、我が果樹園にある樹木と、

隣家果樹園にある樹木とは、各殊別の地區に成長したが、同じく天下に貫く處の風に吹かれて、同じく無宗派の太陽によりて成熟すると云ふ事が、私が楽しんで熟考する所である。

第八講

第七章

一念佛者ハ無碍ノ一道ナリ、ソノイハレイカントナラバ、信心ノ行者ニハ、天神地祇モ敬服シ、魔界外道モ障碍スルコトナシ、罪惡モ業報ヲ感ズルコトアタハズ、諸善モオヨブコトナキユヘナリト云々。

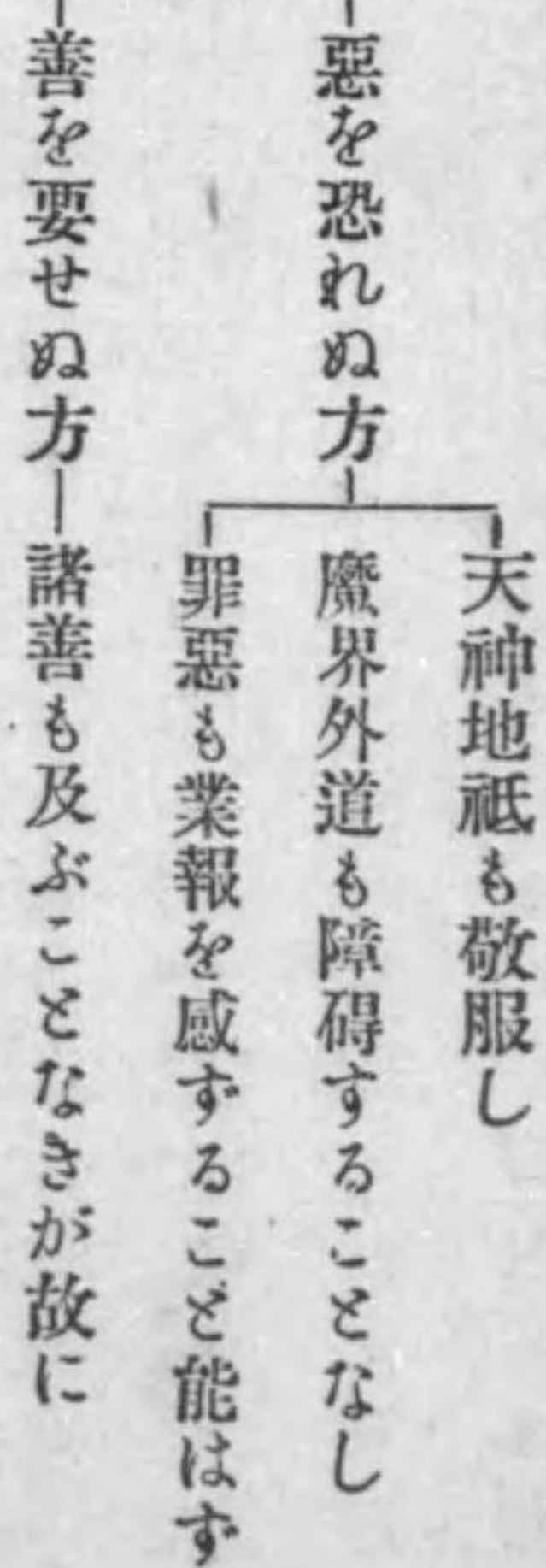
第八章

一念佛ハ行者ノタメニ非行非善ナリ、ワガハカラヒニテ行ズルニアラザレバ非行トイフ。ワガハカラヒニテ、ツクル善ニアラザレバ非善トイフ。ヒトヘニ他力ニシテ、自力ヲハナレタルユヘニ行者ノタメニハ非行非善ナリト云々。

人生の道
をして通
ぜざるな
き無碍の
念佛

今第七章と第八章とを合せて話さう、私はこの二章は第一章の「されば本願を信せんには他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきが故に、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の悪なきが故に」とある註釋で、第七章は正しく第一章のこの文の擴充第八章は第七章の念佛者は無碍の一道なりとある念佛は、他力廻向の大善大行であつて行者の方より云ふと非行非善であると云ふことを示されたものと味ふてゐる。第七章では念佛者は無碍の一道なりとある處が眼目で、他は無碍の説明である、第一章には善を要せぬのが「先」で、惡の恐れぬのが「後」になるが、第七章では惡を恐れぬのが「先」で、善を要せぬのが「後」になつてゐる、これを圖示すると、

念佛者は無碍の一道



第一の天神地祇も敬服することには『現世利益和讃』に、

南無阿彌陀佛をとなふれば 梵王帝釋歸敬す

諸天善神ことごとく よるひるつねにまもるなり。

南無阿彌陀佛をとなふれば 四天大王もろともに

よるひるつねにまもりつゝ よろづの惡鬼をちかづけず。

南無阿彌陀佛をとなふれば 堅牢地祇は尊敬す

かげとかたちのごとくにて よるひるつねにまもるなり。

天神地祇はことごとく 善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに 念佛のひとをまもるなり。

第二の魔界外道も障碍することなきは『現世利益和讃』に、

南無阿彌陀佛をとなふれば 他化天の大魔王

釋迦牟尼佛のみまへにて まもらんとこそちかひしか。

願力不思議の信心は 大菩提心なりければ

天地にみてる惡鬼神 みなことごとくおそるなり。

これを『正像末和讃』には、

九十五種世をけがす 唯佛一道きよくます

菩提に出到してのみぞ 火宅の利益は自然なる。

とあるが、これを明治の高僧と呼ばれたる七里恒順師は『天神地祇
はどんなものか眼に拜むことは出來ぬ魔界外道もどんなのか見
ることが出來ぬが、佛法を喜び寺によりつくやうになると親切な

天神地祇の様な方に御友達が出来、昨日迄の泥棒仲間や喧嘩仲間や賭博連中から彼れは最早駄目、佛法を喜ぶやうになつたからと云ふのは、先方から此方を捨てたのか知らぬが、此方から云へば、悪魔外道が恐れて逃げたのであると云つてゐられるが、念佛の徳、信心の徳、かくも現はれて来る味を適切に御知らせ下されたかと難有思ふてゐる。次に第三の罪惡も業報を感ずること能はずとあるは、蓮師の『御文章』五帖十三通目に、

この發願廻向の大善大功徳をわれら衆生にあたへまします故に無始曠劫よりこのかたつくりおきたる惡業煩惱をば一時に消滅したまふ故にわれらが惡業煩惱はことごとくくみなきわてすでに正定聚不退轉なんど云ふ位に住すと云ふ也。と仰せられ、同第五通には、

されば無始以來つくりとつくる惡業煩惱をのこるところもなく願力不思議を以て消滅するいはれあるが故に正定聚不退の位に住すとなり。

とあり、同第六通には、

過去未來現在の三世の業障一時につみきへて正定聚の位また等正覺の位なんどに定るものなり。

とあり、『和讃』には、

佛法力の不思議には

諸邪業繫さはらねば

彌陀の本弘誓願を

増上縁となづけたり。

清淨光明ならびなし

遇斯光のゆるなれば

一切の業繫ものぞこりぬ

畢竟依を歸命せよ。

とあり、顛倒の妄念はつねにたわざれども、さらに未來の惡報を招

くことないとはこの第三の徳である。第四の諸善も及ぶことなき故にと云ふは、觀經の下上品では五十億劫の罪を除き、下中品では八十億劫の罪を除き、下々品でも八十億劫の罪を除き玉ふことが説かせられてあるが、無有出離之縁の我々は、如何なる善根を以ても救ふことの出来ぬものであるのに、如來様の大願業力はこの罪惡深重の我々を救ひ玉ふて、極樂の往生を遂げさせて頂ける本願故、大善大功德の王である、『阿彌陀經』には、不可以少善根福德因縁得生彼國とありて、少善根福德の因縁では御淨土へは参られず、大善根大福德でなければ決して参られぬ、然るに南無阿彌陀佛は大善根大福德でなければ参られない御淨土へ参らせて下さる御六字であるから、大善の王、大功德の王である、蓮師も、
 それ南無阿彌陀佛と申す文字は、そのかす僅かに六字なれば

何故念佛
は大功德
ありと云
ふや

さのみ功能のあるべきとも覺わざるに、この六字の名號のうちには無上甚深の功德利益の廣大なること、さらにそのきわまりなきものなり。

と仰せられた念佛は、誠に諸善の遠く及ばない大善大功德の王であるから、この大善大功德を與へ賜はれる我れ人は、他の善に心を懸ける要なき故に、他の善も要に非ず念佛にまさるべき善なきが故にと、第一章にも仰せられたのである。

第八章は第七章に明した無碍の一道である念佛は、行者の方から云ふと非行非善で、全く他力の念佛であることを御示しになつた。其明し方は、

わがはからひにて行するにあらざれば非行と云ふ。
 わがはからひにてつくる善にあらざれば非善と云ふ、ひとへ

佛廻向の
大善行な
る故に凡
夫の非行
非善なり

に他力にして自力を離れたる故に。

行者のためには非行非善なりと云々。

とあるが、文意は通じ易いが、この非行非善の目は『寶號經』にの曰くとして、『末燈鈔』にも御引きになつてあるが、祖師が御使ひになつた文は『信卷』に、

凡そ大信海を按ずれば、貴賤縑素を簡ばす、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論せず、行に非ず、善に非ず等。

とあるがそれである、凡夫の方からは非行非善で、佛廻向の大善大行たる南無阿彌陀佛を頂くのである、この貫ひ物の南無阿彌陀佛が無碍の大道である。そこで私が味は、せて頂いてゐる無碍の大道無碍の一道を御話致したい。

無碍の一道と云ふと、念佛者が無碍の一道か、念佛が無碍の一道か、どちらかと云ふ疑問も起らぬではないが、私は思ふに、念佛が無碍の一道であるから、念佛者も無碍の一道である、そこは人法一致に歸すること、思ふ、この第七章の念佛者(人)は無碍の一道(法)なりと、人を以て言葉(言)を起し法を以て結んである處は、無碍の法を以て人を無碍ならしめた結果で、人法不二の味はひである、丁度道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらすと同じで、信じない以前は、兎も角既に信じたる上は、人法一致で無碍の御慈悲を離れた念佛者もなく、念佛者を離れた無碍の御慈悲もない故に、離るべきは道に非ず、離れないが念佛者信心の行者の難有き所以である。その無碍と云ふ言葉は、『華嚴經』に

一切の無碍人は一道より生ず。

とあり、『論註』には

十方の無碍人は一道より生死を出づ、一道とは無碍道なり、無碍とは生死即涅槃と知るを云ふなり。

とあるが、『華嚴經』のは人間が無碍人であつて、『論註』のは初めは人間が無碍人で、後のは道なる法が無碍道である、これが大乘佛教の優秀な所である所が、理談だけであつた時には何等の價値も此處にはない、その生死即涅槃煩惱即菩提の妙味を現實的に味はさせて頂き、實生活に味はゝさせて頂くのが、我淨土真宗である、同じ佛様でも、聖道門の佛様は、御自身丈は生死即涅槃煩惱即菩提を觀得遊ばされても、我々凡夫には之を所談の理として教へてもらつても、之を修行せなければならぬ凡夫には難しい、然るに淨土門の佛様阿彌陀如來は生佛不二生佛無碍の一道を御悟り遊ばされ、無

碍の大悲を御成就なされた御方であるから、直ちに凡夫の上にこの妙味を知らせて下さるのである。聖道門の法は體と相性と相の法門であるから、生死と涅槃煩惱と菩提の關係は波と水のそれと同じである故、同時同所に存在することが出来る、それで此土入聖即身成佛を談ずるが、淨土の法門は相と相事と事のであつて、淨土と穢土、佛陀と凡夫が即ちそれである、同時は許されても、同所即ち同一場所に存在することは出来ぬから、往生淨土と極樂に到り、安養に生れて無愛無疑の御悟りを開かせて頂くのである。娑婆では入正定聚の益を蒙り、極樂に參りて必至滅度の大益を受くるので一益でなく二益である。これを取り違へると淨土真宗でなく、時宗である、注意を要する。

又た體相の上になる用は即ち力であつて、かの大願業力は之れ

無碍の大用である故に淨土眞宗は淨土と云ふ一相一事と、穢土といふ一相一事と、彌陀と云ふ一相一事と、凡夫と云ふ一相一事との相對の法門である。この淨土と云ひ彌陀と云ふ一相一事が涅槃と云ひ菩提と云ふ穢土と云ひ凡夫と云ふ一相一事が生起と云ひ煩惱と云ふのである。茶碗と云ふ相と石と云ふ其體性とは茶碗のある場所が石のある場所、石のある場所が茶碗のある場所であるから同所と云はるゝが、茶碗と云ふ相と急須と云ふ相とは同時にあることが出来ても同所にあることは出来ぬ、そこで茶碗を東に置くことと急須を西に置くとか、急須を北に置くことと茶碗を南に置くとか、東西南北四維上下の區別が立つて来る。これが西方の淨土と云ふことの起つて来る理由である、而て生死と涅槃、煩惱と菩提と分離するのは、茶碗は茶碗、急須は急須と區別せられてあるのと

一般で、茶碗には茶碗の働きあり、急須には急須の働きがある、即ち凡夫は煩惱の働きが現はれて生死に止まるが、彌陀には菩提の働き自覺覺他覺行具滿で、自分も覺り人も覺らせ玉ふ働きがあらせられて、共に大般涅槃を證らせ玉ふのである、二者區別はあつても、茶碗と急須とは深き關係を以て出来たものであるから、始終離れられぬ如く、衆生往生、凡夫救濟の外に佛の本願の要はない、それで茶碗と急須とは別で居つて始終離れぬ如く、凡夫と彌陀とは別であつて始終離れて居らぬ、急須と茶碗とは眼で見ると別であつて、眼に見ぬ心の上に深い關係がある。彌陀大悲の御心は暫くも凡夫を離れ玉はぬ、我々の身心の上には眼に見ぬ如來の心が恒に常に不斷に籠つてゐる。この如來の御心、御慈悲が無碍の御慈悲である、無碍とは障りのなきことで、此手を空中で振り廻はす

のは障る處がないから無碍である所が此手を以てこの机の方へ向けて振て御覽、それ傷い、最うこの机の板からは下へやれぬ、これは障りがあるから有量である、今彌陀如來の御慈悲は無碍と云ふて三世十方の諸佛方の御慈悲は慈悲には違ひないが無碍でない、有碍であるから我等凡夫を救ひに御越し遊ばしても、この胸の内に貪、瞋、痴の煩惱が起つて居ると、それがこの手が机の板で邪魔になつて下へやれぬ如く、煩惱が邪魔になつて得御救ひ遊ばさぬ、然に彌陀如來の御慈悲は少しも邪魔になし給はぬ、貪慾は欲しい惜しいの、餓鬼の心、瞋恚は腹立ちで修羅の心、愚痴は不明で畜生の心、その餓鬼の心、修羅の心、畜生の心なりで其儘御救ひ下さるのが無碍の大慈悲である、『尊號眞像銘文』にも、

無碍と云ふはさはることなしなとり、衆生の煩惱惡業にさへ

られざるなり。

とあり、『唯信鈔文意』には、

無碍は有情の惡業煩惱にさへられざるなり。

とある、この無碍の御慈悲が分れば、如何なるものも往生させて頂ける、又有情の惡業にさへられてる我が御本願の御目宛である。

以上の御話は法の方の無碍を御話したのである。次にこの御慈悲を頂いた上には我身の上に無碍の味を味は、せて頂く側を云ふと、倫理上でも心に罪なきものは例令牢獄の裡にあることも苦しいことはない、彼のソクラテースの弟子エビキユラスは、師ソクラテースは牢獄に入られなかつたと云つてゐると云ふのは身體は牢獄に入つて居られても心に苦まれぬから牢獄に入つて居らぬと云つたのである、ソクラテースの死ぬる時、クリトイやヒユ

牢獄に入つて心尙
措潤たり

ト一は如何してあなたの爲に葬式しやうかと云つた時ソクテ
 一スは「汝等は予の身體の葬式は出来やうが己れは死んでも死なぬ」と靈魂の不滅を説きつゝ、瞑目なされた、これも無碍の生活の一である。又宗教でなくても興味を持てゐると、世間に苦しく思はるゝ事でも楽しく暮すことが出来る、西洋のお伽噺に「多年書齋の中から出たことのない哲學者先生に、或人が春日郊外の散歩を勧めたので、先生始めて郊外に出ると、四方の山邊は緑に萌わて麥は穂々と延び、雲雀は空中に天樂を奏し、犬は堤上の蒲公英の花に狂ひ、この畫幅の中に農夫の耕作してゐるのを見た、先生「貴方は幸福な人です仕合者です」と譽めると、農夫は、失敬な私は貧乏で商賣するにも資本なく智識なく、實に仕方なしに百姓して居る、それも斯うして働かねば食へぬから働くが、年が年中一日でも緩々思つた

ことではないと云つて、吃き初めたので、大に先生の考へと違ひ閉口して、其處を通り過すと、一人の四十前後の男が破れたシャツに崩れた靴を履き、汗を流して棒で玉を頻りに打つて居るので、先生は「これは御氣の毒、そんな破れたシャツを着た装りでさう迄辛う働いて居なければ、妻子が養へぬとは、御氣毒である」と云ふと、大將失敬な僕は三度の食事を廢しても、此運動は好きた、晝の中は皆百姓で忙しいから相手はないので、獨り稽古をしてゐるのである、こんな楽しいことはない」と云つた、それから先生は町へ出て電車に乗る、電車の運轉臺にゐる運轉手がリン／＼と鈴を鳴らすと、王公貴人も雲の如く集つた人々も、兩側に分れて、其中を勢込んで車を走らすのを見て、先生思らく「この快事、男子生れて、須く運轉手たるべし、實にこの仕事は、壯快な仕合物だ」と云ふ、運轉手は「失敬な、僕は家貧

で教育も受けず會社にも銀行にも雇つてくれぬ故、運轉手になつたのであるが、斯うして鈴を鳴らしても、聾の老人がヒヨロ／＼と出て來たり子供が走り出したりして、一寸の暇も安心が出來ぬ」と云ふ暫くして次の停留場へ行くと、一人の五十格好の男が帽子から洋服に迄塵を被つて居るのが、飛び込んで來たので「イヤ貴方は何をして來た？」と云ふと「實はこの頃自働車を買つて今郊外で走り廻つて來たのであるが、未だ慣れぬ故町中では走れもせぬから御者に持たせて歸した處だ」と云ふ、先生運轉手に失敗したので、それは氣の毒貴方程の年を取つてそのやうに頭から塵を被つて自働車で駆け歩かねば妻子が養へぬとは氣の毒、紳士は「失敬な自働車は金の懸る贅澤な乗り物で、こんな壯快なものはない」と云ふたとの話である。破れシャツを着て汗を流しても趣味を知らぬ百

姓は苦しみとなし、運動家は楽しみとなし、同じく運動しながら運轉手は電車で苦しみ、紳士は自働車で楽しむ、だから趣味を感じる」と云ふことも亦一種の無碍道である、要するに客觀的の苦しみもあるが、苦樂は主觀的なることが多い、古歌に、

我袖の玉とひろひてつゝまばや

打ちつけられし石も瓦も

と孔子聖人は七十にして耳順ふと云はれ、蓮如上人は人の前で惡口が云へないなら陰でも可いから云つてくれ、悪い所は直すからと仰せられてあるが、心得一つで惡口を惡口とせず、に我惡を改むることが出来る、又歌にも、

柔かに撫でられてさへ腹たつに

嚴しく打てど按摩には云ふ。

罪あれば
苦し

二百四十
全く精神一つで苦しい娑婆でも楽しく暮せる之に反して身は安
樂に日暮しても心に罪あるものは苦しむものである。英國倫敦
の銀行の金を盗んだ盜賊が隠れて銀行員の金庫係が罪に伏して
遠島になり、一人は七年で死し一人は九年で死んだ最早世間に自
分が盗んだと思ふものもないのに、其金を本に段々に殖やして大
なる財産を造り安逸なるべき暮しをしながら良心には大なる苦
痛を禁じ得ないで自首したと云ふ例もある。又英國で大金を盗
んで米國に渡りて二十年間商賣を致し、最早知る者もないと英國
に歸り倫敦の町で買物をして街へ出ると後から一人の拘兒を追
ふて巡査が來り、それだ〜捕へてくれと云ふ、そこで自分を追つ
て來るのだと思ふて腰を抜かし、私が泥棒であると云つて捕へら
れたと云ふ話もある。それから先年北海道の集治監から脱がれ

眞に樂し
きは名利
を超越す

出した四人が、山間の農家で衣類を盗み金を掠めて青森へ渡り、晝
は山に隠れ夜は旅して東京の淺草迄來り宿屋に着いたが、北海道
以來少しも眠られない、心が落ちつけぬので警察へ自首して、その
晩監獄に泊められたのに何時見ても眞に熟睡して居る、翌日巡査
が調べると、罪あり乍ら罪なき眞似をして居ても安心が出来ぬが、
罪の有り丈を打ち明かして了つたら氣樂に眠らせて貰つたと云
ふたことであるが、誠に味はひのある話で、我身の罪の全部を佛の
前に懺悔し、佛は我罪の總てを知り玉ふ、そのなりで其儘救ふて頂
けると思ふと安樂の極みである。貧苦の中でも御慈悲が頂ける
と、仕合者と云つて暮される、播州の伊藤長次郎氏先代を動かした
婆さんの話も有名なものであるが、其日暮しのわびしい庵に住み
ながらも、仕合せ者であると喜びつゞけた婆さんの心は、主人長次

郎氏が自分の女房や小供を失つた時、哀惜の果て信心に入つて初めて了解された。又先年東京で亡くなられた廣島縣出身の實業家福間久米吉氏は、病の苦しい時程、如來様の御慈悲が私に同情を寄せて下さると思ふと、病苦の中に云ひ難い喜びがあると申された。『觀經』の韋提希夫人は、子から湯水さへ断たれ、提婆には苦められ玉ふのが因縁になつて、御慈悲を知られた、若し子が孝行を盡し、提婆が忠義であつたならば、提婆は面白い所死ぬ迄、浮かれて佛法に縁遠く暮らし、未來永々劫苦まねばならぬのが、阿闍世が不孝で、提婆が敵になつてくれたればこそ、未來際の仕合せをさせて頂く身となられ、遂に不孝の我子の後姿を拜み、邪見な提婆を善知識と拜せられるやうな身になられたのは、慥かに無碍の大悲に依つて、無碍の大道に出で、無碍の生活を遊ばさるゝに至らせられたのである。

親鸞聖人が越後に流されながら、大師聖人源空もし流刑に處せられたまはずば、我又配所におもむかみや、もし我配所におもむかずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是なほ師教の恩致なり。

と喜ばれた所は無碍の一道宗教の堂奥に入つた風光に外ならぬ。某監獄教誨師があつた、その監獄に一人の死刑囚があり、凍り渡る監房に獨り淋しく座つてゐる、彼は親にも妻にも兄弟にも子供にも親族知己にも見捨てられ、社會にも國家にも用ゐられず、世界唯一人、温かい涙を流して呉れる人のない眞に孤獨の人となり、旬日を出でない中に絞罪に處せられやうとする、この時教誨師、この世にも未來にも全く見離された四人に對して、彌陀如來は獨り熱い涙を濺がせられて救ふて下さる、そのことを懇々日夜に

一念の信
にて生涯
の非を悔

説くど、彼罪囚も眞信仰に入り、死に瀕して血色特に麗しく満面に
 恐悦の情溢れ、念佛稱名絶ゆることなく自言して「我身程仕合せも
 のなし」、「人間に生れたる甲斐あり」、「五十年は夢の如く過ごして
 更に價なし、死刑前の三日は五十年に優る、三日能く五十年を成す」
 と、世の中に高位高官金銭財寶榮華榮譽の裡にあつても、この信仰
 なき人は人生は五十年に盡き、五尺に限られ、未來に光明も希望も
 歡樂もない絶望暗黒の淵に入るのである。彼罪囚は五十年の生涯
 は反古に送つた様であるが、死前三日は五十年の罪過を知り、罪過
 に加はつて下さる佛陀大慈を仰ぎ、以て五十年間の唯一大事最大
 要件の信心獲得が出来たのは、眞價ある三日人界受生の意義果せ
 りと思ふ、この味はひに住して死んだならば現世一旦に馳驅して
 死んだ金銭富貴の人よりも遙に多幸であると思ふ、それだから囚

人の心身共に一變して、怨みに思ふた警察吏、裁判官、獄吏に對して、
 恩人を以て之に對すると云ふ柔和な心立てとなつた、始めて親の
 恩を感じ、妻子に對する愛情を解した、それで優しい顔をして處刑
 を受けたのである、神妙に獄則を守る三日があつたのである。警
 察なく裁判所なく監獄なく我が天壽盡くる迄惡業を働いてゐた
 であつたならば、遂に佛法聽聞の機會は無かつたであらう、獄卒に
 對して今迄は濟みませんでしたと兩手合はせ拜むに至り、死刑執
 行の日には今迄住んでゐた自分の監房に向ひ、この處が未來佛に
 して頂く用意を整へさせてもらつた御恩の場所、永劫忘れ難き勿
 體ない席と云ふて拜み、故郷の親に對しても不孝重ねたる罪を謝
 し、親様あればこそ聞法させて頂くとも出来ましたと喜びしは、人
 生に生れ甲斐ある、人生の眞意義に洞達し徹底したものだと思ふ。

善根薄少にして未だ火宅を出でざる處に、たま／＼南浮の人身をうけて幸に西方の佛教にあへり、この故に生々に受けし六道の生よりは此の度の人身最も喜ばしとの玄談は、信仰によりて初めて味はるゝことである。

第九講

第九章

一、念佛マフシサフラヘドモ、踊躍歡喜ノコ、ロオロソカニサフラウコト、マタイソギ淨土ヘマヒリタキコ、ロノサフラハヌハ、イカニトサフラウベキコトニテ、サフラウヤラント、マフシイレテサフラヒシカバ、親鸞モコノ不審アリツルニ、唯圓坊オナジコ、ロニテアリケリ。ヨク／＼案ジミレバ、天ニオドリ地ニオドルホドニ、ヨロコブベキコトヲ、ヨロコバヌニテ、イヨ往生ハ一定トオモヒタマフベキナリ。ヨロコブベキコ、ロヲオサヘテ、ヨロコバセザルハ煩惱ノ所爲ナリ、シカルニ佛カ子テシロシメシテ、煩惱具足ノ凡夫ト、オホセラレタルコ

トナレバ、他力ノ悲願ハ、カクノゴトキノワレラガタメナリケ
 リトシラレテ、イヨ／＼タノモシクオボユルナリ。マタ淨土
 ヘイソギマイリタキコ、ロノナクテ、イササカ所勞ノコトモ
 アレバ、死ナンズルヤラント、コ、ロボソクオボユルコトモ、煩
 惱ノ所爲ナリ。久遠劫ヨリイママデ流轉セル苦惱ノ舊里ハ
 ステガタク、イマダムマレザル安養ノ淨土ハ、コヒシカラズサ
 フラウコト、マコトニヨクヨク煩惱ノ興盛ニサフラウニコソ、
 ナゴリオシクオモヘドモ、娑婆ノ縁ツキテ、チカラナクシテオ
 ハルトキニ、カノ土ヘハマヒルベキナリ、イソギマヒリタキコ
 、ロナキモノヲ、コトニアハレミタマフナリ、コレニツケテコ
 ソ、イヨ／＼大悲大願ハタノモシク、往生ハ決定ト存ジサフラ
 へ。踊躍歡喜ノコ、ロモアリ、イソギ淨土ヘモ、マヒリタクサ

フラハンニハ、煩惱ノナキヤラント、アヤシクサフラヒナマジ
 ト云々。

上來御本願の旨を詳述して頂いてあつたが、尙ほ私共の一般的
 な不審に對し、こゝに如信上人が、凡夫の心の其まゝを打ち出して
 質問なされたのが此一章であります。動かぬ信仰とは正しくこ
 の味ひであります。惡人凡夫の爲めの御助けだと云ふことを何
 とも思つてゐない人には分らぬけれども、こゝに信仰の髓が在る
 のであります。

扱て本章を御話するに當りて深く感ずることは、昨年一月二十
 一日午前三時二十分に亡くなられた醫學博士生沼曹六氏の婦人
 きく子の方の御話である、私は丁度昨年一月二十一日の朝新橋へ
 歸り着くと、米國サクラメント教會駐在開教師工藤惠達君の夫人

博士夫人
 生沼きく
 子氏の信
 仰

が妊娠の身を以て、二人の小供を連れ、一月三日桑港を出發し、五日目に四歳になる女の子は肺炎を起して死去し、その死骸を抱へて二十一日の午後二時横濱へ上陸せらるゝ旨の無線電信が參つたので、直ぐに横濱に行つて迎へ、二十二日夜分に横濱久保山の火葬場で火葬に附し、二十三日の朝東京へ歸ると、鎌倉から手紙が參つて居る。開封して見ると、生沼きく子夫人の御不幸の知らせであつた。直ちに電話で尋ねると、生沼家も御里の加藤家も皆鎌倉へ出られて女中一人今日御骨の御伴して歸らるゝと云ふ話、何時に着かれるかと問ふと分らぬと云ふ。仍て其日の用事を便じて、翌二十四日生沼家へ悔みに出ると、丁度玄關に近角氏と一處になり、共に佛前で讀經をした。その際種々と生沼博士からや御生母から御話を承つた。私が夫人と最後の面會は、昨年岩手縣盛岡の島地大等氏

の御寺故島地默雷和上の御寺の御遠忌の説教に參り、歸路東京に立寄つた處が重病に陥り、最早今生であへぬから一度御逢ひしたいと云ふことで、鎌倉へ見舞に參り一日御話をして來たが、丁度其の日瓜生大將の令嬢も御出になり共に御喜びさせて頂いたのが終りであつた。承れば夫人は常に御主人博士の未來を案じて居られたが、一月六日近角氏が見舞はれ終日御話があり、爲めに主人の心も動いたので非常に喜ばれたさうである。その際最早寸珍の御聖教では病のために拜見するのが苦しいと云ふので、此『歎異鈔』の第九章も書仙紙大の紙に書いて貰ひ、それを壁に張つてもらひ、讀んで喜ばれて居た。殊に二十日の晩、二十一日午前三時頃に長谷川基氏が自分の病院から世話せられたと云ふ山本某と看護婦に肩が凝るから叩いてくれと云はれたので、看護婦は起して

肩を叩いて居ると三度初めから終り迄一々讀んで、その意味を看護婦に話し、最後に看護婦に讀ませて「分りましたか、分りましたか、御前も看護をして下さつた因縁にどうか喜んでおくれ」と云はれる。看護婦も因縁の悪き不仕合せ者であつた爲め「難有う私も今から喜ばさせて頂きます」と云ひ乍ら喜び御禮を申すなり息が切れて往生なされた。私への度々の手紙にもこの『歎異鈔』第九章目の御言葉の見て居らぬことはない、又これ迄逢ふ度毎にこの章を御話なさらない事はなかつた、其手紙は、

此日頃は何とやらおほく筆とる事も致し申さず、唯あけくれ煩惱にまなこさへられ、また思ひ出しては心づかせていたゞき、かゝる病苦の中よりも悦ばしていたゞき居申候。此度といふ此度の私の心もちは、とても筆紙には盡しがたく、またくるしき

いきの此言葉にても申がたし、何卒々々折あらば近角先生より御きゝとり下され度候、それはそれは信仰に入るの一念其時より、もつとくそれはく一分一厘も餘地は御座なく候、かんがへれば考へる程罪のふかき我身實にあたまのあげ様もない仕方のない此私罪は罪のまんま、煩惱はくるしむ其まんま、實に有りがたい、きれいになつて極樂へ參るにはあらで、地獄行の其すがたで早助けていたゞくとは、さてもく何とした難有い事、御座いませう、此我がよるこびが嬉しくつてく、いつも苦しい時は後でこゝを思はせて頂だき居り候、かゝる長い病氣と相成と、ついこゝ心も邪見に煩惱もたねまなく、唯々もう歎異鈔の第九章でばつかり助かつて居申候。實にくもう仕て見様なき私の様な者唯御慈悲ばかりに御座候、あわせて皆様の御惠實に

中々ありあまる事に御座候、此度近角先生へ掛物になる様に佛
兼て知し召して「どの實に有り難い、私の命とも云ふ此言葉をか
いて頂き度願ひ申候間、何卒御許し下され度候。何とやら此頃
は氣もみじかく相成、いつそいきがたみとやら人にすつかり物
でもやつてしまつたら、せいゝするかしらんなど、馬鹿な事
ばかり思ひ居り、昨日は大きにしかられ申候。やつぱりいつ迄
居ても性分でこまり申候、御さむさの折柄女中もなくさぞゝ
かし御なんざと唯々恐入居候、やがて何とか都合も出来候事と
存じ候間、何卒ゝ御身御大切に子供ごもくれゝ願上參らせ
候、まだゝ申上たき事の候へども、又氣分よろしき時に、こ
れにて筆どめ參らせ候。かしこ。

生沼母上に送られた法話の手紙

またもや降りいでいとつれゝに御座候、さぞやゝ何にか
やと事々に御心せはしく一増御こゝろを勞され候御事と、まこ
とにゝ恐入申候、御かげ様にて最早熱も引きし様にさふらへ
ば、先々御安心下され度候、萬事は曹六より御きゝとり下され度
候。唯今も最早おひるかと思へば、やつと九時十分過ぎ、少し早
く起きるとかくの如き結果、おかしき程に御座候、もとより病は
死のたよりとかや、されども凡夫のあさはかさ、平生何事もなき
時は實に口先ばかりにて無常の世の常、浮世のならひなど、誠
こうまんに申居りさふらへども、事なき時はみな上のそら、眞實
此胸にひつしとばかりにかんじ悟り候時が、眞に無常を感じ候
時に御座候、平生業成とはかゝる時初めてほんに無事なる時事

なき時平生が大切に御座候、私も此度と云ふ此度、日頃おきかせ
いたゞき居り候御かげ、つく／＼身にしみ唯々やるせなき御慈
悲を悦ばせていたゞき居候、つらく／＼思ひ候に、世に私程罪深き
者はこれなく、何のなすこともなく罪のみ重ね、最早私の立場は
一寸の餘地もこれなく候、かゝる罪業深重の私、思へば思ふ程仕
て見様これなく、もし兼て御きかせなくば、あゝ勿體ない何に不
自由なくこんな奴を、これと申すも佛様の夜ひる此身につきそ
ひ給ひ、その廣大の御慈悲あればこそ、實にかゝるわびしき賤が
身も尊い親様の御そば、今日も明日も悦びづめによるこびても
あきたらぬ幸福に候を、やゝともすると煩惱を起し人生のはか
なきをかこち、病のくるしさをなげき、もしまたうれしき時は、病
もうちわすれ泣きつ笑ひつ實に氣ちがひの如き有様に御座候、

かゝる身心どもにかたわの其私、そのかたわが可愛さう、其ま
せうになれぬそれがあはれである、さぞやつらからう、さぞや苦
しからう、佛兼てしろしめし、もう御前の心はよく／＼知つて知
りぬいて居る、汝一心正念にして直ちに來れ、我よく汝を守らん、
最早唯御一佛あるのみ、かゝる大慈大悲の御親ある上からは、う
き人生も無常なる世も、何の蚊のといふべき事の候哉、唯此の御
慈悲だにあらばと、そのみ心強く悦ばしく嬉しく南無阿彌陀
佛々々々々々嬉しいにつけかなしいにつけ感謝致し居候。
何とぞ不順の折から御大切に、何事も彌陀にはからわれ候身に
候まゝ、あまり御心配なくおまかせ申します、御慈悲を御悦び下
され度萬々念じ上參らせ候、此頃は誠に手がふるへ一本の手紙
は半日もかゝり申候、唯今母參りよろしく申候、先はこれにて筆

をどめ参らせ候かしこ。

六月五日

私の話しはこの生ける信仰より外に何もありません。今一通は、實に此度は私もいよく如來の廣大なる御慈悲をます／＼信じさせていたゞき實に申様もなく悦ばせていたゞき唯々感謝にむせび居申候、それにつけても我身の罪の深き事仕て見様なき煩惱具足の凡夫、親にも子にも實にあかせぬ程のあさましき胸の中、其あさましき善き心のおこらぬ其者が眞に佛はあはれなりと思召し、其やるせなき御心より助けてやりたい、どうかすくうてやりたいとの御親切より、五劫思惟の願を起したまひ、永劫の御修業をつまれ、さあ我は汝にかくまで難儀をして本願を成就したぞ、さあ此上はよい事をいかに仕度いと思へばとて、と

ても／＼何一つ我力で及ぶ事なき仕て見様なき汝を、我はすくはん爲にかゝる修業をもせしなれば汝は唯この親のやるせない心をきいてくれよ、かゝる大悲の親ありと知つて、來れよ、其なやみの多い人生、其無常の世界に唯ぼんやりとしてゐるが如何にも／＼可愛さうでたわれぬのだ。其地獄一定の其者が殊にかわいさうなのであるぞ、あはれであるぞと、此大慈大悲の御親ばかりはこの私の心中を、よいもあしいも知りぬいて、たすけにやおかぬとの御誓願、あゝ難有や勿體なや、此極重の罪人をおかゝく迄佛は思ふて下さるかや、もうあゝもこうも思ふて見る餘地もない、嗚呼何とした我身は仕合せ者と、唯一心に感謝の御稱名より外は御座なく、とても／＼口にも言葉にも其悦びはたわはて申候、南無阿彌陀佛／＼。

とあるが、きく子様は數年前から肺患にかゝり、鎌倉に出養生して居らるゝ内主人の生沼曹六氏は獨逸に留學せらるゝことゝなり、二人の子供と母と鎌倉に居られ、秋の夕冬の夜の淋しさど、病のため人生の果敢なさを感じ、鎌倉の空に宗教心を呼び起し、私が丁度東京駐在を命せられて毎月十六日の令女教會、十七日の東京眞宗婦人會の講演を致したが、毎月鎌倉から聴講に來られ、一週間位は晝夜四方八方の私の行く所へ參詣せられることにきまつて居た、丁度四十三年の冬大森の善友會へ參りた時も同道せられ、近角氏と私との話を聽かれ、夫から近角氏に因縁が出來、而て四十四年の春私は米國へ參ることゝなりたが、病軀を押して横濱迄送つて下され、その時既に今生の暇乞をしたのであつたが、生命長らへて屢々近角氏の處へ通はれ、私が歸朝した時の法悦の有様は感心なも

のであつたが、遂に亡くなられた。中々書物好きで私の書いたもの近角氏の著書杯も殆んど全部を味はれたが、最後にこの本鈔第九章を生命として繰り返へしく讀まれた、病身にしては醫師の言葉は無駄には聞かぬ、生沼夫人の如く、老年の一人の養母、小さき愛兒を若い夫にまかせて自分は一人東京を離れて鎌倉に病を養ひ、日々重りゆく身體を持たるゝ身に取りては、いかに本章が難有かつたか知れない。

念佛申し候へども。

とはこれ、唯圓房の間であることが讀みもて行くうちに分ります、随分大膽に出られました、が、信心の一段は總べて斯くきびしい態度でなければならぬのである。扱て念佛とは先きにも云つた選擇本願の念佛である。稱へる力でない、遍數でない、稱へらるゝ念

佛で助けて頂ける念佛である。祖師聖人の義から云ふと御報謝の念佛である。蓮如上人の御語から申すと、佛恩の深き事を思ひ浮べて稱へる念佛も、不圖稱へる念佛も、信の上の念佛であれば佛恩報謝に備はると仰せられてあるが、今はその信の上に不圖稱ふる念佛である。『御一代聞書』には種々な念佛が出て居る。

念佛しつゝ、髻を剃る

一、津の國郡家主計といへる人あり、ひまなく念佛まをさる、髻をそる時、さらぬことなし、わすれて念佛申すなり。

一、念佛申すも人の名聞氣に思はれじと思ひてたしなむが大義なる由、或人申され候、つねの人の心中に變り候。

口癖になりて、たしなむが大儀なるやうな人もあるが、或は本章の念佛もこの類の念佛で、御念佛申させて頂くも、

踊躍歡喜の心おろそかに候こと、またいそぎ淨土へ参りたき心の候はぬは如何にと候ふべきことにて候やらんと、申し候て候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯圓房同じ心にありけり。

師弟子の告白一 致す

とある、唯圓は本鈔著者の下に出でし河和田の報佛寺の唯圓のことで、平太郎の弟平次郎のことである。この偽らざる告白には、我等も恐れ入る外はないのである。之が誠です。親鸞聖人も唯圓房の胸の中に入つて共に味はねばならぬものがあつた。『信卷』に

誠知悲哉、愚禿鸞沈沒於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可恥可傷矣。

とありて、實際に唯圓と同じ心に在すことは御自ら『本典』に御自白遊ばされてある。

よく／＼案じ見れば天におどり地におどるほごによるこぶ
可きことをよろこばぬにて、いよく／＼往生は一定と思ひたま
ふべきなり。

これは第一章の罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんが爲の願にて
まします、この御言葉第三章の願を起し玉ふの本意惡人成佛のた
めなれば惡人尤も往生の正因なりとの本願が適切に私に立ち向
ふて下さる謂れであります。此處まで私等が追ひつめられて見
れば、その願力に對して兎角は云つてゐられぬ、唯だ我身のあさま
しき儘に御助け下さる御慈悲に對して實に難有きも難有き限り
と感ぜざるを得ないのである。特に、

よろこぶべき心をおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲な
り、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せら

れたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためな
りけりと知られて、いよく／＼たのもしくおぼゆるなり。

とある處などは生沼夫人の三通の手紙をよく讀んで味はひ合は
せて頂きたいのである。私には夫人の喜ばれた様と、常陸の國か
ら老の身の聖人に逢ひたやと態々尋ねて來り、兩人對座でくつろ
ひ語られる様を、如信上人側にありて靜かに聽聞せられ難有涙に
咽ばれた有様とが、今も眼の前に見えるやうである。

またいそぎ淨土へまいりたき心のなくて、いさゝか所勞のこ
と、いもあれは死なんづるやらんと心ぼそくおぼゆることも
煩惱の所爲なり。

この一段は唯圓房の第二の問に答へられたもので、極樂には彌陀
如來の親様が今か今かと待つて居て下さると云ふことは、承つて

居り乍ら、参り度心はなく、少しの所勞病氣で兩三日も食事が進まねば、極樂へ近よるとは思はず、最う今度は死ぬかと心細く感ずることとも亦煩惱の所爲であるとの御答であるが、妄念の外に凡夫の地體はないのであります、然りたゞ妄念の凡夫である。生沼夫人などは永い間幾度も幾度もこの經驗を積まれたのであるから、深く痛感せらるゝ節である。

久遠劫より今迄流轉せる苦惱の舊里はすて難く、未だ生れざる安養の淨土はこひしからず候こと、誠によく／＼煩惱の興盛にて候ふにこそ。

と實際つまらぬ處と知り乍らこの娑婆は好きで去りたくはなし、結構な處とは知り乍ら淨土こひしの思ひはない、御嫁にゆくのに先方の婿殿はよき人家は金持で御兩親も善き方と知り乍ら、愈々これが我家の出おさめかと思ふと涙が出る、私は一昨年は一ヶ年米國に居り、早く歸りたくてならなかつたが、扱て愈々歸るとなりて桑港の埠頭に送られ信者の人々に船の中迄送つて頂いた時には又別れるのがつらくて涙が禁じ得なかつた、今度の淨土参りもこれと少しも違はぬと云ふてその様な心ではならぬかと云ふと、次の御詞に、

なごりおしくは候へども、娑婆の縁つきて力なくして終る時にかの土へはまいるべきなり。

とありて名殘惜しく思へど、娑婆に金鎖をつけて確と結びつけてあつた様に思へど、娑婆逗留の縁盡きて生きてゐる力がなくなり、命終其期に及ぶと御淨土へ参らせて頂くのである、即ち私から参り度き心、そんな殊勝の心を起さねばならぬとは仰せられぬ淨土

ねがはしの心を起すことも出来ぬ故、『口傳鈔』には

一、凡夫として毎事勇猛のふるまいみな虚假たる事、愛別離苦にあふて、父母妻子の別離をかなしむるとき、佛法をたもち念佛する機、いふ甲斐なくなげきかなしむこと、しかるべからずとて、かれをはぢしめいさむること、多分先達めきたるともがら、みなかくの如し、この條聖道の諸宗を行學する機のおもひならはしにて、淨土眞宗の機教をしらざるものなり、まづ凡夫はことにおいてつたなくおろかなり、その奸詐なる性の實なるをつゝみて、賢善なるよしをもてなすは、みな不實虚假なり、たとひ未來の生處を彌陀の報土とおもひさため、ともに淨土の再會をうたがひなしと期すとも、おくれさきだつ一旦のかなしみ、まごへる凡夫として、なんぞこれなからん、なかんづくに曠

劫流轉の世々生々の芳契、今生をもて輪轉の結句とし、愛執愛着的のかりのやど、この人界の火宅、出離の舊里たるべきあひだ、依正二報ともにいかでかなごりおしからざらん、これを思はずんば、凡衆の攝にあらざるべし、けなげならんこそ、あやまた自力聖道の機たる歟、いまの淨土他力の機に非る歟とも、うたがひつべけれ、おろかにつたなくして、なげきかなしまんこと、他力往生の機に相應たるべし、うちまかせて凡夫のありさまにかはりめあるべからず、往生の一大事をば如來にまかせたてまつり、今生の身のふるまひ、心のむげやう、口にいふ事、貪瞋痴の三毒を根として、殺生等の十惡穢身のあらんほごは、斷がたく伏しがたきによりて、是を離るゝ事あるべからざれば、なか／＼おろかにつたなげなる煩惱成就の凡夫にて、たゞかり

にかざるところなきすがたにてはんべらんこそ淨土眞宗の本願の正機たるべけれど、まさしくおほせありき、さればつねのひとは妻子眷屬の愛執ふかきをば、臨終のきわには近づけじ、見じとひきさくるならひ也、それと云ふは著想にひかれて惡道に墮せしめざらんが爲なり、この條自力聖道のつねの心なり、他力の眞宗には、この義あるべからず、そのゆへは如何に境界を絶離すといふとも、たもつところの他力の佛法なくは、なにをもてか生死を出離せん、たとひ妄愛の迷心深重なりといふとも、もとよりかゝる機をむねと攝持せんといでたちて、これが爲にまうけられたる本願なるによりて、至極大罪の五逆謗法等の無間の業因を重しとしましませれば、まして愛別離苦にたへざる悲歎にさへらるべからず、淨土往生の信心

往生は願
力にて決
定す

成就したらんにつけても、このたびが輪廻生死のはてなれば、なげきかなしみも、もともふかかるといふべきについて、あとまぐらにならびゐて悲歎嗚咽し、ひだりみぎに群集して戀慕涕泣すとも、さらにそれによるべからず、さなからんこそ凡夫げもなくて殆んど他力往生の機には不相應なるかやとも、きははれつべけれ、さればみたからん境界をもはゝかるべからず、なげきかなしまんをも、いさむべからず云云。

次に眞宗絶對他力の極致を出されて

いそぎまいりたき心のなきものを、ことにあはれみたまふなり、これにつけてこそ、いよく大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ。

と大悲大願業力のたのもしきを感じられる、それに若しこれが反

踊躍歡喜の心もあり、いそぎ淨土へまいりたき心もあり、いそぎ淨土へ参りたく候らはんには煩惱のなきやらんとあやし
く候ひなましと云云。

とあらば喜びの心淨土へ参りたき心も起らば煩惱がないのでは
ないか、若し煩惱がなければ本願の正客、如來の御救ひに洩れはせ
ぬかと案せられる、何故と云ふに他力の本願は煩惱があつて喜ば
れぬ極樂へ行きたくないものゝために、かくの如き我等の爲に、い
そぎ参りたき心のないものを殊更にあはれみ玉ふの本願である
からである。それで本願のために我等が正客となつて居ること、
慈悲のためには我等が一子となつて居ることが、この思召で了得
することが出来るのであります、我等の往生は天が地になつても

我が感ず
る廣大の
慈悲

間違ひありませぬ。

つまり斯くの如き生活にある我等が救濟せらるゝ御慈悲の廣
大な力が、現在この身に加はつてゐるのを味はひ仰がねばならぬ
のであります。斯うなれば唯だ己れ忘れて喜びつゝ、報謝の念佛
を申し、幸福な日をむかへて行くばかりであります。(終)

聖人のつれの仰には、彌陀の五劫思惟の願を、よく案すれば、ひさへに親鸞一人が爲な
りけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんさ、おぼしめしたち
ける本願のかたちけなきよき、御逃懷さふらひしことを、今また案するに、善導の自身はこ
れ、現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常にしづみ常に流轉して、出離の縁あること
なき身ぞ知れさいふ金言に、すこしもたがはせ、おぼしめます、さればかたじけなく、わが
御身にひきかけて、我等が身の罪惡の深きほごをも知らず、如來の御恩のかたき事をも知ら
ずして、まよへるを、おもひ知らせんが爲にて候ひけり、誠に如來の御恩さいふことをば、
さたなくして、我も人も善し惡しさいふ事のみ申しあへり、聖人の仰せには、善惡の二つ
總じてもて存知せざるなり、其故は如來の御心に善しき、おぼしめすほごに、知りさほした

らばこそ、よきを知りたるにてもあらめ、如來の惡しとおほしめすほどに、知りまほしたらばこそ、惡しきを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこそ、みなもてそらこそ、たわこそ、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにておほしますこそ、仰せは候ひしが、まことに我も人も、そらこそをのみ申しあひて候。

(本鈔十八章の一節)

讚
歎
異
鈔
講
話
終

讚
歎
異
鈔
講
話
附
錄

次 目	
一	宗教の分類
二	自力教と道徳
三	半自力教の歸結
四	他力救済の眞髓
五	信仰の道徳的發展
六	信仰と道徳との一致點

宗教と倫理

在米領布哇 佐藤巖英講演

私は、之から暫く「宗教と倫理」と云ふ問題に就て、自分の平日味つて居る處を話して共々に喜ばさせて頂きたいと思ひます。

借宗教上の問題は決して緩つくりした閑問題ではなく、氣がついてみれば、一瞬間も延ばすことの出来ぬ問題である。蓮如上人は「佛法には明日はなし」と申されましたが實は明日どころではない、一時間も待たれぬ問題である。故に朝夕を待たぬとも云つてあるが、極々切りつめてみると出息入息を待たぬと云つて出た息が入る息を待たれぬ程の急な問題である。それは一息繼がざれば千載永く行くで、出た息なりで入る息が

這入つて來なかつたら千載は愚か、千劫萬劫幾億劫の永い未來の迷の闇の裡へ旅立をせねばならぬからである。故に今こゝで解決せねば未來永々劫血の涙で泣き明さねばならぬから、少しも猶豫の出來ぬ問題である。斯様な大切な問題であるから宗教上の話は所謂眞劍勝負であります。頭上に刃を頂いて居つての話であります。故に宗教上の話は翻りものにしやうと云ふ者には分らぬ。彼の惠可神光が達磨大師を江北の小林山に始めて訪ねた時、達磨は壁に向つて坐禪してゐて、振り向きもしなかつた。すると神光も達磨が相手になつてくれぬのは、自分の熱心が未だ足らぬのであるから、達磨の心の動くまで自分もこゝに立つてゐやうと前日から翌日の夕方まで庭の眞中に立つてゐた。然し達磨は相手にせぬ。そこで惠可は刀を抜いて自分の腕を切り、壁に向つてゐる達磨に「斯くまで一心に佛法を求めてゐるのに相手にしてくれぬか」と血汐の

したゝる腕を投げつけた時、達磨はオヤこれは一寸眞面目らしい、これなれば佛法の話が分らうと漸く話しかけたと云ふとであるが、實際は斯様な態度でなければならぬ、故に宗教の話は翻り話でもなければ、空な話でもない。實際な活きた話でありますから、其お心で聞いて頂きたい。

一、宗教の分類

氣の長い學者から見れば、宗教の解釋も種々に分れ、宗教に對する説及びその定義も千百に垂んとして居やう。されど、その實際に活用する宗教、即ち眞劍勝負で實踐されて行く宗教とは、私等の未だ接せざる靈界の上にも不安極まる此の現實界の上に於ても、あらゆる不安を取り除いて全き安心を與へるものでなくては、眞の活ける實のある宗教とは申され

ぬと私は信じてゐる。故に私に取つては、斯の如き活きた宗教でなくては何等の意味も味ひもないのである。實際我々は過去の罪惡に惱み、現在の淺間敷心狀を歎き、未來の暗黒に悶居るもの、過去の罪惡と現在の情なき日を暮してゐる私共の未來は、浮ぶ瀬のなきものである。而して五十年の生命は今宵將に盡きんとしてゐる。五尺の體軀は今や將に崩壊けんとしてゐる。靜かに思へば、悲みと歎きと恐れとの三つの心に全身は覆はれ、何等の光明も希望も認められず、我々は只不安の淵に悶々苦むものと云ふの外はないのである。斯かる不安の境より總ての不安を取り除きて、全心に安堵を與へるものを宗教と云ふのである。一言にして云へば、宗教は全き安心を與ふるものである。然り而してこの安心を得せしむる宗教にも多くの種類がありまして、既に古人も早や分りするやうに種々に分類されてありますが、これも學者の騁りものとして考へ

四

る時と頭上に刃を仰いでゐるやうな思ひになつて考へる時とは、大に相違がありますから、今日は特にその實行上より分類された分類法に従つてお話しすれば、第一が自力教、第二が他力教、この外に純自力教にもあらず、純他力教にもあらず、中間のものがある。それを半自力半他力教と申します。いま自力教、半自力半他力教、純他力教と云ふ次第でお話致します

二、自力教と道徳

自力教は己が身心を清め盡して罪惡を洗ひ落し、現在の心を清淨にして而して未來に向ふ教へであるから、道徳教、倫理教と云つて宜しい。この教は結構であり立派であるが、實際に出來得ることであらうか、自己の心が清め盡されて、これで満足であると自分の心に安心する時が果して

五

得らるゝであらうか、恐らく人間としては出来得ないことであらうと思ふ。實際にこれで満足だと思ふときは徳行の止りであつて最う進まない。まだ不足々々と思ふて居る間が進む時である。されば生涯徳を進める人は生涯不足のついて廻る人で生涯これでよしと安心することの出来ない人である。徳には徳を知る人と徳を思ふ人と徳を行ふ人との區別がある。徳を知つた丈の人は徳は行はるゝものと思ふて居るが、愈實行せんとするに至れば行ふどころか思はれもせぬ。故に古今東西の歴史を見ると徳を知り徳を解した人は實行出来るものと思ふて居るから傲慢であるが徳を思ふに至り徳を實行せんとするに至つた人は却々に實行の出来ぬものと謙遜に終つてゐられる。東洋の徳行家と云はれた孔子の如きも學の講せざる徳の進まざる不善を知りて避くる能はず、善を知りて移る能はざるは、これ吾が憂也と云つて泣き支那の善導大

師の如きは徳操堅固の人なりしも御自分の胸の中ではどうしても道は行へぬ徳は行へぬと御感じ遊ばされて「我身はこれ現に罪惡生死の凡夫曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁あることなし」と歎せられ親鸞聖人は「悲哉愚禿釋鸞愛樂の曠海に沈没し名利の大山に迷惑すと歎かせられ、述懐讚には、

淨土眞宗に歸すれども

眞實の心はありがたし

虛假不實のわが身に

清淨の心もさらになし。

とも、

惡性さらにやめがたし

こゝろは蛇蝎のごとくなり

修善も雜毒なる故に

虛假の行とぞなづけたる。

とも歎かせられてある。これが言論の人の道徳觀でなく實行の人の道徳觀である。我々は道徳などの行へるものではない、道徳の話になつた

ら顔出しの出来るものでない、口に云ふのではない、實際心に深く感じ
てゐる人が眞の道徳の實行家である。斯の如き實感に入つた人は、自分
は罪人である。不徳の親玉である。不忠不孝の親玉である。常に思ふ
てゐる。學問でも眞の學者は何事も眞に分るものではない。最後は何
が何やら分らないと云ふ事が分つた人である。昔から大賢は愚なるが
如しと云つてあるがこれが本當のことであらう。これも未だ客位の話
であるが、自分が三四年も大病で休み、家内中の者が邪魔にする。五遍呼
んでも七遍呼んでも返事をしてくれる者もない家に寝てゐても不平や
愚痴が溢れはせぬか、實際心が白紙の如き鏡の如き清浄なるものでも不
平が起り愚痴の溢れた時は、心の白紙も眞黒に汚されて墨の如き心とな
り、愚痴の心の起つた時は鏡の如き心も何にも映らぬ雲に覆はれた心と
なる。然るに一點にても汚點があつては安心が出来ぬ。されば自力教

道徳教では到底安心が出来ぬ。

三、半自力教の歸結

茲に於て第二に半自力教半他力教の必要が起る。半自力教半他力教
は、如何に身を清め心を淨めやうとしても、自分一人の力では清めること
が出来ぬ故に神佛の力をかりて清めたい、誘惑に勝ちたいと云ふのであ
る。近頃は青年の中にも此の種の考をもつてゐる人が多くなり、名望家
が私慾のために名望を失ひ、監獄などに投じた人や、多數の監獄の罪人は
皆同じやうに、若し自分に神佛を信じて居つたらこんなことにはならざ
りしものをと云ふてゐる。これは實は宗教の眞意義を知らぬ人で、宗教
利用論者であるが、かう云ふ考を以てゐる人が世の中には多い。從來の

内務省の役人や今日の文部省の大臣始め宗教局の人々の考はこれと同じく宗教利用論者である。自らのために利用せんとする者も、人のために利用せんとする者も利用論者は共に宗教の眞意義を解し得ぬ。云はゞ宗教に對しては盲目である。されど實際いまの時代はこの種の考になつて、この考から宗教を要求してゐる。

爾しこれは要求するもの、側の神佛に對する希望であるが、半自力半他力教の神や佛は身の清き心の清きものを助くると云ふので、恰も學校の先生が生徒に對する慈悲と同じく、三年生の生徒は一人も残らず四年級に進級させたい。一年生の生徒は一人も残らず二年生に進級させてやりたいけれども、試験に落第するものは進級さす事が出来ぬ如く、身を清め心を清め得た者は佛や神の救をうくる事が出来るけれども、身も心も清め得ざる者は御救ひをうくる事が出来ぬ。故に半自力半他力

教の神や佛は恰も小供が犬に「ワンと云へバンをやる」と云ふが如き神佛で、ワンと云ふ犬はパンを貰へるが、ワンと得云はぬ、犬はパンを得もらばぬのと同じことである。故に半自力半他力教も其宗教の最後の目的を達するためには、矢張り自力教と同じく神佛の救を得らるゝ資格に達することが容易でない。即ち半自力半他力教の神や佛は、稱ふる者は助くるも稱へ得ざる者は得助けぬ。祈る者は助くるも祈り得ざる者は得助けぬ。身心の清き者は助くるも、その清くなり得ざる者は得助けぬ。罪咎を悔み改むる者は助くるも、その悔み改め得ざるものは得助けぬ。處の神や佛である。故に三年も四年も大病で寢て居り家庭中の者に邪魔にされてゐる時、口には佛の御名を稱ふる事が出来ても心から清淨に稱ふる事が出来やうか。口には祈ることが出来ても心から祈ることが出来やうか。人に清く見せかけることは出来ても自分の心から清くなるこ

とが出来やうか。眞に心から罪惡を悔ゆる心が起らうか。實際は死に類して居つても未だ全快するだらう。未だこれ位では死ねぬと思ふのが人情の常で、旅順の戦争の時には一日の戦争に千、千五百と死んだが戦ふ前には人は死んでも自分だけは未だ死なぬと思ふて皆居つたらしい。爾し絶對に死なぬと思ふ者は一人もなかつたが、愈今日の戦争に自分が死ぬるのであると思ふたものは少なかつたらしい。病氣の時の病人の心事も此れと同じで、眞に罪を悔ひ眞に祈ることが出来ずに死ぬる者が多いと思ふ。すると半自力半他力教では御救ひを蒙ることが出来ぬ。茲に到つて最後の純他力教に來らねばならぬこととなる。

國木田獨歩氏は此處に至つて口に祈るは安けれども心に祈ることは難い。最う予は祈り得ぬ。世に祈り得るものを救ふの神よりは、更に力の大なる祈り得ざる者を救ふの神はあらざるか、若しかゝる神あらば予

の如きも救はれんと『病床録』に出き残して行かれたが、同じ基督教信者でも彼の網島梁川氏は我が道友近角常觀氏に親鸞聖人の御聖教を送られて罪ある身祈り得ざる身を救ひ給ふ即ち「無明長夜の燈炬なり智眼暗しと悲しむな生死大海の船筏なり罪障重しとなげかざれ願力無窮にましませば罪業深重も重からず、佛智無邊にましませば散亂放逸もすてられず底の彌陀如來の大慈悲に氣付き喜びの裡に瞑目して行かれた。この事は氏の遺著『寸光録』全部に殆ど氏のこの信仰の告白が載せてあるので分る。吾々罪に泣くものゝその罪を咎め給はず。吾々日々の淺間敷心情に歎くものゝその心情を咎め給はず。未來をも捨て給はざる純他力的救済主義の宗教ならでは吾々は活きることが出来ぬ。こゝに於て人は最後にこの他力教を要求するに至るのである。

四、他力救済の眞髓

十四

この他力救済の根柢をなせる佛陀の大悲、如來の深き御慈悲を赤裸に打ち出して御示し遊ばされたが『歎異鈔』一部である。その第一章には、善き子も悪しき子も健かなる子も病める子も親の眼に捨つる事のなきが如く、佛陀の大悲の御眼には善を善とも悪を悪とも認め給はず、善悪を超絶し給ふ大悲あることを示し給ひて、

しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきが故に、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に。

と仰せられてあるが、親の愛を受け、親の御見捨てを受けぬためには善悪は關係せず、善き子も悪しき子も見捨て給はず、愛を受くること出来る、

されど親を心配さすと、心配さぬと云ふことになる、善き子と悪しき子は、大いに相違がある。此點は大に味ふべきことであります。親はいくら子が多くても一人も捨てる子はなく、憎いと思ひ給ふ子はない。この事を知らしめ給ふたのが彼の鬼子母神である。鬼子母神は千人の子供を持つて居りながら、人間の子を取つて食ふて居た。そこで御釋迦様は鬼子母神の千人の内、一人の子を盗みて鐵鉢のうちに御隠し遊ばされた。すると鬼子母神は、狂ひの如くなつて心配し出し、御釋迦様にお尋ねした。すると御釋迦様は、御前は千人もある子のうちで一人失つてすら、そんなに心配するが僅かに一人や二人しかない人間が子を取られたら如何につらく思ふであらうか。御前は今日より以後、人の子を取らなければ御前の子を出してやらうと云つて、鐵鉢の中から子を出して渡された。鬼子母神はそれより人の子を取らず、人の子を守る方になられた。

十五

實に親は澤山の子供の中には善人も悪人もあらうけれども、一人も捨てる子のなきが如く、彌陀如來に捨て給ふ子供は一人もない。吾々を獨り子の如く憐念し給ふのである。我々はこの様な横着者なりで彌陀如來の御慈悲には、一子の如く護られ思はれてゐるのであります。次に「慈悲の眼に憎しと思ふものぞなき罪ある身こそ猶ほあわれなれ」と云ふ歌もある如く親の御慈悲の極みを云へば「正直者の賢き子供の事は安心であるが、片輪で病氣で不正直な愚かな子供のことは氣にかゝり、あれの事が苦になつて死ぬにも死なれぬとは道樂者や悪人や病身者の子を持つてゐる親から始終聞かされる話であるが、これが即ち我々の信する阿彌陀如來の御慈悲と同様である。「佛の大悲は苦者に於てす」とは、全くこの御意である。これを『歎異鈔』の第二章には、

煩惱具足の我等はいづれの行にても生死を離るゝことあるべから

ざるをわれみたまひて、願をおこし給ふ本意、悪人成佛のためなれば他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり、よつて善人だに往生す、まして悪人はと、おほせさふらひきと云云。

とある。斯くの如きの如來、斯くの如きの本願あればこそ、吾々のやうな罪ふかき淺間敷暗黒の身にも光明を認めさせて頂き、罪に死せる身を蘇生させて頂けるのである。これが純粹他力教、絕對他力教の極意である。この教があればこそ我々如きものも、この佛の御慈悲を承れば安心させて頂くことが出来るのである。善惡超絶の慈悲より見れば悪人も佛は恐れ給はず救ひたまふのである。悪人正機の慈悲より見れば悪人のために起し給ふ本願なれば、悪人なるが故に救ふと云ふのが佛の慈悲である。この御慈悲に逢へば悪人を許し給ふのが却つて反對に善人にならざるを得ざるに至りはせぬかと思はれるのであります。

今一例を以てこれを御話すれば彼の有名な信州更科の姨捨山の話
 思ひ出します。母親が年を取りてあまり愚痴を溢すので、息子は孫と二
 人で破れたる籠に母親を入れて深い山奥の谷間へ捨てに行つた。
 すると途中母親は籠の中から手を伸ばして頻りに山の中の木の枝を折
 りて道しるべをしてゐる。愈々山奥の谷間に息子は籠をおろして阿母
 さん御前さんは内へ歸らうと思ふて道しるべのために木の枝を折つて
 來られたが私がこの山に捨てに來たことを思つたら歸つて來られても
 寄せつけもせず、相手にもせぬからさう云ふ邪見な心を起さずに山犬の
 餌食になるか、大蛇の餌食になつて死んで御仕舞ひなさいと云つた。す
 ると母親は御前の捨てに來る心を知つた上は歸る心は毛頭ないが御前
 はこの山の中へ初めて來たのであらうから山路に迷ふと可愛相である
 ゆへ、道の覺悟に木の枝を折つて來たから彼れを便りに迷はずに歸つて

くれと云ふ。さらば歸らうと息子が孫に云ふと孫は阿父さん暫く待つ
 て下さい彼の籠を持つて歸らねばならぬからと云ふ、父はあんな破れた
 籠はいらぬ捨てよおけと孫はイヤさうではない。阿父さんがまた
 年を取るとあの籠に入れて捨てに來なければならぬと云つた。爰に於
 て息子は捨てられても子を思ふ親の慈悲と自分が親を捨つれば、自分も
 亦子から捨てられねばならぬことゝを思ひ嗚呼私が悪かつたとあやま
 り果てゝ再び母を我家に連れ歸り、最後まで親孝行をしたと云ふ話であ
 る。この捨てられても子を思ふ親心と悪人をも捨てぬ佛様の御慈悲が
 味はれて見るとこの不孝は出來ぬ。その上悪いことは出來ぬやうにな
 る。是と同じ例で、今も尙ほ私の心に深く刻まれてる有り難い話があり
 ます。私が先年近衛師團の布教を致して居ります際、麻生の近衛歩兵
 第三聯隊で講話の後、中隊長室で御茶を御馳走になつた。その時御茶

の御給仕をして下さつたのが同中隊付の歩兵中尉でありましたが、その中尉は熊本市の出生であつた。同氏が同じ熊本の町に於ける中尉の子供の時の出来事を物語られ、思はず泣かされたのである。それは熊本のある町に同町唯一の素封家があり、家には老夫婦に三人の子供を持つてゐる。長男は最早や丁年を過ぎ弟と妹とは未だ小供であつた。所がその長男が冬になると餘所の軒下を僅かに借りて夜なく焼芋を賣る一人の綺麗な娘と關係をした。所が親は夫を知らず、頻りに息子に嫁を娶ることを勧める。けれども息子は未だく早くいと云つて應せぬ、父親は頻りに勧める。遂に息子は、さやうなれば嫁を娶るが、私には此世は思か來世までと約束した内縁の女がある。それを是非貰ふてくれと云ふ。その女は、ごこの女かと云へば、彼の家の軒下に焼芋を賣つてゐる女だと云ふ。父親は驚いて「我家は、先祖代々此の町内にては旦那様く」と云は

れたる家柄、又親族も皆家柄であるのに、如何に因縁とは云ひながら、同じ町内の焼芋屋の娘を女房に貰へるか、と云つて大に怒り、俺が眼の黒い間は、そんなことはならぬ」と叱りつけたのである。然るに息子は戀に囚はれて狂氣の如くなつてゐたので、阿父さんさへ居なければ、阿母さん一人なら自分の思ひ通りになると息子は前後も四圍も考へずに、あられもない心を起し、或る夜片手に薪を握り、片手にナイフを取つて無心に寝てゐる父親の頭蓋骨を目蒐けて力まかせに打つと一打でグツと父親は死ぬこの物音に驚きて泣き出したる弟と妹とを打ち殺した。母親はこの有り様を恐れて御前は何と云ふ心を起したかと蒲團をかぶつて立ちあがるを、片手に持ちしナイフで母の口中を力任せに抉り、それなり大道に飛び出し大音聲で呼び立てたので隣家の者も噪ぎ立つて、警察も來たが、誰も息子を疑ふ者はなく、先づ母親を病院に送り、探偵は犯人の搜索にかゝ

り種々に心配したが分らぬ。丁度母の弟が病院に来て姉に誰が殺したのかと訊ねるけれども更に答へない。そこで弟は「御前の家が貧乏であれば何ともないが斯んなに身代があるから斯うなる上は親類が疑はれる、どうぞ弟を助けると思ふて誰が殺したかを云つてくれ」と理に理を述べて説きつけたら、姉は理に窮して、小指を出し「件が殺したけれども、どうぞ内證にしてくれ」と云つた。親と云ふ者は斯くまでも慈悲な者か、殺されても子を罪に落しともない親の慈悲である。伯父は一室に息子を招いて「母は小指を出して御前が殺したけれども内證にしてやつてくれと拜んで頼んだぞ」と話したら、息子は親の親切に感じ、目の醒めたる如く本心に立ち歸り、かくまでの親の情を今少し早く知つたら、斯んなことにはならなかつたらうにと泣き叫び、上の恵みで葬儀だけさせて頂き監獄に送られたが、丁度葬儀の時には棺前に進み香は上げたが、その場で腰を脱

かし、式が済むなり縛に就いて送られた。と云ふ話であつた。此の母親の殺されても子を罪に落しともないと云ふ誠は、全く我々の罪を許し給ふ彌陀如来の御慈悲と同じである。かくまでも有り難き佛の慈悲を味はさして貰ふて見ると、我々は唯だ恐れ入つて信じさせて戴かすには居れない。彌陀の悲願はこの母親の慈愛どころではありませぬ。

五、信仰の道德的發展

以上の二つの話によるも、悪人を咎めず、その罪を許し給ふの親の慈悲が却て悪人を善人にする力のある處かと味はるゝのであります。これが我が浄土眞宗に於ける安心即ち信仰の眞諦の方面で、悪人を許したのが却つて、起行即ち倫理の俗諦の方面で善人たらしむる所の意味が味

はれることゝ存じます。そこで人は善なれ悪なる勿れ斯くすべし斯くすべからずと云ふ冷い／＼律法的の倫理や道德訓では却々善人になり得ざるも悪嫌いな佛が悪を知りつゝ黙つて悪を許し給ふ佛の御心罪嫌いな佛が罪を知りつゝ黙つて罪を許し給ふ佛の御心を察し奉るに至れば悪を許されながら悪が出来ず罪を許されながら罪が許されぬやうになりはせぬかこれを觸光柔輒の願益に預るとも轉悪成善の大益を蒙るとも申すのである。

今少しく深く踏みこんで御話すると佛陀は子が病氣をすれば親は暫くも子供の側を離れずに介抱してゐるのを見て親は子供の病氣を好きだと見たら大なる誤である。可愛い子供が嫌な病氣にかゝつたのが苦になつて忘れられず捨てゝ置けぬから側を離れずに介抱するので決して病氣が好きではない。故に病氣が重れば親は苦しみ病氣が軽ければ

親は喜ぶのと同じく又指に腫物が出来てうづきづめいたみづめになるど頭は十日でも二十日でも一目も得寝ぬ。この指の病氣のために頭の得寝ぬのを以て頭が指の病氣を好きだと云ふたら大きな誤である。大切な指が痛むから暫くも頭が得寝ぬのである。頭は指の病氣が重れば猶痛み指の病氣が軽ければ頭が喜ぶのと同じやうに佛は衆生安樂我安樂衆生苦惱我苦惱と仰せられて私が喜べば佛も喜ばせられ我々が苦しめば佛も苦しみ給ふことは子供が善くなれば親は喜び子供が悪くなれば親が悲しむと同じく親は子が悪くなれば悲しむことは悲しむけれども見棄ても忘れも得せぬ。のみならず私はこの子のことが苦になつて死ぬに死なれぬと申してゐる。それ程までに悪い子を思ふて下さるから親は悪い子が好きだと思つたら大變な誤解でめる。この親心を知つた上は更に此の上親の苦しみ給ふやうなことは人情の上から云ふて

も出来ぬことだと思ふ。實際我々が只今悪心を起せば佛は御胸をキャ
 くと御痛め遊ばし我々が只今善心を起せば佛は己を忘れて喜んで下
 さるのであると云ふ心が起れば斯んな私のやうなものゝために、永く永
 く御心を苦しめ給へる佛様を、苦しめ奉つてはならぬ。それを慎まぬ時
 は、丁度昔の學問をした人が、眠氣を催ふする時に眠氣を醒ますために天
 井から荒縄を輪にしてかけてそれに首をかけて勉強をした。眠氣を催
 ふして俯向になりかけると荒縄に首が縛められて眼をさましたと云ふ
 話があり、又腿に錐をあてがうて勉強をした。眠氣が催ふせば錐が腿に
 さゝるので眼をさましたと云ふ話もあるが、今もこれと同じく我々が情
 なき心を起し、浅間敷心を起すと、その時は佛様が荒縄で首を縛められ、錐
 が腿へさゝる如く、御胸を御痛め下さるのであるとの感じが起り、この佛
 様と、軟々與佛起夜々與佛臥、一年三百六十五日夜も晝も暫くも、この私の

ために御心を痛めさせらるゝ佛様と一處に居るのであるとの感じが起
 るやうになると、佛様の御慈悲にほだされて、知らず識らず善心になられ
 るのである。これを『歎異鈔』の第十六節には、

いよく願力を仰ぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこ
 うろもいでくべし、すべて、よろづのことにつけて、往生には、かしこき
 おもひをみせずして、たゞほれんと、彌陀の御恩の深重なることを
 つねにおもひいだしまいらすべし、しかれば念佛も申され候、これ自
 然なり、わがはからはざるを自然とまふすなり、これすなはち他力に
 てまします。

と仰せられてあるが、これ全く我々が佛心を信仰する心、即ち佛の御慈悲
 の御心に動かさるゝ所の味であります。それ故子が病氣になれば親は
 暫くも子の側を離れぬ如く、佛様は悪人でも御見捨ては下さらぬけれど

も子の病氣が重りゆけば親は悲しみ、子の病氣が軽くなつてゆけば親も喜ぶが如く、我々が悪を思ひ、悪を行へば悲しみ、歎き遊ばすから、御見棄てなさらぬと云ふて悪をしてはならぬと云ふを、親鸞聖人は『末燈鈔』に悪はおもふさまに、ふるまふべしと、おほせられ候らんこそ、かへすかへすあるべくも候はず。

とも、

悪くるしからずといふことゆめくあるべからず候。

とも、

いつか、わがころの、わるきにまかせて、ふるまへとは候。

とも、

われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどするとは、あるべくも候はず

とも仰せられ、如信上人は『歎異鈔』に

そのかみ邪見におちたる人ありて、悪をつくりたるものを、たすげんと云ふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしを云ひて、やうくにあしざまなること、きこねさふらひしとき、御消息にくすりあればとて、毒このむべからずとこそあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。

と仰せられて、悪をふるまへとかぐるしからずとか云ふて悪をすゝめたり、悪を許し給ふことは、全くないのみならず、佛法に耳を傾け、佛法を聴かんとする程の人は、必ず世の無常に氣付き、未來の大切なることにも氣付き、因果應報の恐ろしきことをも知り、今までは悪を悪とも思はず、罪を罪とも思はずに暮せし者が、我が身の悪、我が身の罪に氣付き、只今眼閉ぢなば如何ならんと未來を恐るゝ處より、佛法を聴聞するやうになるのが總

ての人の常である。されば自分の罪を恐れ、悪を恐れ、世を厭ふ所より佛法聴聞せんと出掛けたものが、佛法を聴聞して悪になると云ふことはあるべき筈がない。また實際、佛法聴聞の出発點が玩弄的に佛法を翫りものにするのならば、兎に角、眞に佛法に心をかけ、佛法を喜ぶ人なれば、世を厭ふしるしとして、如何に悪人を捨てずとあるも、善に向ふべきが當然でありますから、そのことを『末燈鈔』には、

この世のわろきをもすて、あさましきをもせざらんこそ、世をいとひ念佛をまふすことにては候へ、としごろ念佛する人なんどの、人のために、あしきことをし、またいひもせば、世をいとふしるしなし。

とも、

凡夫なればとて、なにごともおもふさまならば、ぬすみもし、人をも殺し、なんどすべきかは、もとぬすみこゝろあらん人も、極樂をねがひ、念

佛まふす程のことになりなば、もとひがうたるこゝろをも、おもひなをしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、悪くるしからずといふこと、ゆめ／＼あるべからず候、煩惱にくるはされて、おもはざるほかに、すまじきことをふるまい、いふまじきことをいひ、おもふまじきことをも、おもふにてこそあれ、さはらぬことなればとて、ひこのためにもはらくろく、すまじきことをもし、いふまじきことをもいは、煩惱にくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきことをもせば、返す／＼もあるまじきことなり。

とあり、又一章には、

貪欲の煩惱にくるはされて、欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり、愚痴の煩惱にまごはされて、おもふまじきことなども、おこることにてこそ候へ、めでた

き佛の御ちかひあればとて、わざとすまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、なんぞせんは、よく／＼この世をいとはしからず身のわろきをも思ひしらぬにて候へば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにも、こゝろざしのおはしまさぬにて候云々。

と仰せられ、更に、

年頃念佛して往生をねがふしるしには、もとあしかりし、わがこゝろも、おもひかへして、とも同朋にも、ねんごろに、こゝろのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそはおぼわ候へ、よく／＼御こゝろわ候べし。

と仰せられ、特にこの間の消息を詳かにしては、

おの／＼の昔は、彌陀のちかひをもしらす、阿彌陀佛をもまふさず、おはしまし候ひしが、釋迦彌陀の御方便にもよふされて、いま彌陀のち

かひをきゝはじめて、おはします身にて候なり、もとは無明の酒に酔ひて、貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみ、このみめしあふて候つるに、佛のちかひを、きゝはじめしより、無明の酔も、やう／＼すこしづゝさめ、三毒をも、すこしづゝこのますして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりて、おはしましあふて候ぞかし、しかるに、なほゑひも、さめやらぬに、かさねて酔をすゝめ、毒もきねやらぬに、なほ毒をすゝめられ候らんこそ、あさましく候へ、煩惱具足の身なればとて、こゝろにまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、こゝろにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもこゝろのまゝにてあるべしと、まふしあふて候らんこそ、返す／＼不便におぼわ候へ、ゑひもさめぬさきになほ酒をすゝめ、毒もきねやらぬにいよ／＼毒をすゝめんが如しく、くすりあり、毒をこのめと候らんこと

はあるべくも候はずとこそおぼね候へ、佛の御名をもき、念佛をも申して、ひさしくなりておはしまさん人々は後世のあしきことをいどふしるし、この身のあしきことをば、いとひすてんとおぼしめすしるしも候べしとこそ、おぼね候へ、はじめて佛のちかひをき、はじむる人々の、わが身のわろく、こゝろのわろきを、おもひしりて、この身のやうにては、何ぞ往生せんすると云ふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わがこゝろの善悪をばさたせず、むかへたまふぞとは申候へ、かくきゝてのち、佛を信せんと、おもふこゝろふかくなりぬるには、まことこの身をもいとい、流轉せんことをも、かなしみて、ふかくちかひを信じ、阿彌陀佛をも、このみまふしなんぞする人は、もとのこゝろのまゝにて、悪事をもふるまひなんぞせじと、おぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいどふしるしにても候はめ。

と念佛を申し佛法を信するものゝ世を厭ふしるしとして、身口意の慎むべきことを、最も叮嚀に御示し遊ばされましたが、最後に、若しも佛教信者が少しも身心を慎む心がけなく、思ふまじきことをも思ひ、云ふまじきことをも云ひ、すまじきことをもし、我まゝ勝手な振舞をせば、遂に世間より佛法までを忌み嫌はるゝに至り、即ち諺に、坊主が憎けりや袈裟まで憎いと云ふが如く、佛教信者の振舞一つで、佛敎まで世に捨てらるゝに至らんかを恐れ給ひて、親鸞聖人は『末燈鈔』に、

善知識を愚かに思ひ、師をそしるものをば、謗法のもと申すなり、親をそしるものをば、五逆のものと申すなり、同座せざれど候なり。

ども、

されば北の郡に候ひし、善證房は、親をのり、善信をやう／＼に、そしり候ひしかば、ちかづきむつまじくおもひ候はで、ちかづけず候ひき。

とも。

この御中の人々も、少々は、あしきさまなることのきこね候めり師を
そしり、善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふ
よしき候こそ、あさましく候へずでに、謗法の人なり、五逆の人なり
なれむつおべからず。

とありますが『御消息集』にも、

ひがごを、ことさらにこのみて、念佛のひとくくの、さはりとなり師
のためにも善知識のためにも、どがとなさせたまふべし。

と仰せられ、又た、

わるき身なればとて、ことさらに、ひがごをこのみて、師のため、善知
識のために、あしきことを沙汰し、念佛のひとくくのために、どがとな
るべきことをしらぬは、佛恩をしらす、よくくはからひ給ふべし。

とも。

佛法をばやぶる人なし、佛法者のやぶるにたとへたるには獅子の身
中の虫のしゝをくらふがごとしと候へば、念佛者をば、佛法者のやぶ
り、さまたげ候なり、よくくこゝろねたまふべし。

とも仰せられてありますが、これは大に慎むべきことであります。これ
に就て面白き話がありますから話して置きますが、この頃米國本土や布
哇における日本人排斥の聲の八釜敷際に、佛教徒として味はふて置くに
は結構な話と思ふ、それは彼の西班牙の全盛なる時代に、玖馬島を取り、西
班牙人は土人に對して非常なる慘虐を行ひしが、その際一方ならぬ怨み
を玖馬島の土人より受けた。或る時土人の會長を捕へて、これを火烙り
の刑に處せんとする時、西班牙の天主教の宣教師來り、今將に刑に處せら
れんとする會長に對し、天主教を勧めんとせしに、會長は天國には西班牙

人は居らざるにや」と問ふ、宣教師答へて「然り多くの西班牙人は居るなり」と云ふ、その時會長は「されば予は是の如き慘虐を敢てする西班牙人の居る天國には行き度くなし、故に御身の宗教談は聽くの要なし、早く殺せ殺せ」と叫びて刑に就いたと云ふ話である。佛教徒たる者も大いに注意すべきことである。又ブレナードと申す宣教師が亞米利加印度人の部落に入りて、基督教を傳へんとせし時、土人は「何故に君は我等に基督教を勧めんとするか、基督教徒は我等亞米利加印度人（王人）よりも遙かに悪しきに非ずや、汝等は酒を呑み、偽を云ひ、盗をなす、我等が酒を呑むに至れるは汝等の教へたる所なり、又彼等が我等の財産と土地を強奪するの甚しき遂に我等をして、嚴酷なる處置に出づるの止むを得ざるに至らしめたり、我等若し基督教に入らば、汝等の如き惡徒に墮落するの恐れあり、我等は我等の先祖の生きたる如く生き、その死したる如く死せんとす」と昔基督

教界に宗教裁判なるものゝ存せし時、宗教的儀式の下に祈禱を捧げつゝ、無罪の良民を虐殺せしを見て、基督教を嫌ふに至りし人もある。又伊太利の熱心なる基督教信者は、今日猶ほ強盜山賊を行へるを見て、基督教徒を嫌ふに至りし例もある。又露國の田舎を旅行せる人が、最も信者の多き處に於て、片手に珠數をつま繰りながら他人の懷中物を掏りたるを見て、基督教を嫌ふに至りしものもある。又日曜日、鬚を剃るは神に對して不敬なりと云ふ信者が、年中他人の鬚を剃らんと心がける基督教信者を見、安息日に靴に墨を塗らざる程の熱心なる信者が、常に隣人の名譽を傷くることに苦心せるを見て、全然基督教を捨つるに至りし例もあるが、これらの話は吾々佛教信徒に取りて最も大切なる教訓とせなければならぬ。實に佛教徒に取りては他山の石とも云ふべき話である。

予は從來、米國の文明、米國の秩序、米國の公德、米國のあらゆる善き點が

基督教徒の賜なりと説き聞かされ、斯の如く基督教は有り難きものかと思ひたること屢々なりしが、偕て近頃(ちかごろ)に於ける米國は、内には墨人や印度人や猶太人を排斥し、外には亞細亞人を排斥し、基督教には禁酒主義なるも、米國に於ける千九百年の一人の酒の費消高は十七ギャロンに達し、千九百三年の一人の酒の費消高は十八ギャロンに達して居つて世界第一の酒呑み國である。汽車の進行を止める強盜や、白中ビストル強盜が往來したり、日本人と見れば打つたり叩いたり、あらゆる侮辱を敢てするに至れるを見るやうになつては、やむなく基督教を疑はなければならぬ。またこれを以て吾々佛教徒に移して考へますと、身の寒さを感じるやうな氣が致します。我々相互に對して、世間の人は次の如き眼を以て見てゐらるゝのでありますから、大ひに佛教のために慎まねばなりません。

六、信仰と道德との一致點

最後に徹底した信仰即ち宗教の眞面目たる信仰が人に獲得された時は必ずその道德が美しく實踐されて行くことと思ひます、こゝに生きた訓話があります。

只今の岡山の第十七師團長仙波中將が曾て下關の要塞司令官を務めてゐらるゝ時に、當時の參謀長と共に深く佛教を喜ばれたさうであるが、下關にては有名な教法寺と云ふ大きな寺がある。その寺へ夜分の説教を始終聽聞に參られたさうである。處が羽織袴をつけて行くと寺でチャホヤと大切にされるから高座の前で説教の聽聞が出来ぬために、烏打帽に兵兒帶容で爺さんや媪さんと一處になつて始終説教を聽聞されたさうであるが、或る夜、仙波中將が參詣されると、眞宗の俗諦義倫理道德に關

する説教であつた。中將は非常に喜ばれた。然るに夜分十一時前に説教がすんで歸られる途中、下關の町を離れたる所より參詣せる同行四五十人も共に歸るに、表の道を通れば遠く裏の道を通れば近いが、恐ろしき一本橋を渡らねばならぬ。然るに一行の中に七八十とも思ふ媼さんが一人ある。その媼さんも矢張り近路の方に来る。處が仙波中將今晚のやうな難有き話を聞いたものは、どうしても此の媼さんを負んで渡さねばならぬが、誰が負うて渡すだらうと大きな木蔭に身を潜めて見てゐるゝと四五十人の信者は先へくと橋を渡りて一人も媼さんを渡してやらうとせぬので陸軍中將は、ア、佛教信者と云ふ者は何たる情ないものか、今晚の説教の分つたものは一人も居らぬかと云つて、最後に只一人渡り初めんとする時、媼さんの側へ中將躍り出で渡して上げんと背を向けると同じやうに木蔭に隠れて様子を見てゐた參謀長閣下、その媼さん

を閣下に負はしては濟まぬと争ふて、自分が媼さんを負つて渡すと、媼さんも亦禮も云はずに知らぬ顔して行つて仕舞つたが、渡さずに行つた佛教信者も信者だが、負ふて渡して貰ひながら一言の禮も云はずに去つた媼さんも媼さんで、この中將が吾々仲間の佛教信者であつたから、まあそれで濟んだが、世間多數の佛教信者に非ざる人は明けても暮れても、吾々佛教徒の日暮を見てゐるのであるから、我々教徒の行によりて、この大法を傷けてはならぬと注意していたゞき度いと思ひます。併せてこの生ける信仰は如何に任運無作の道德的行爲となつて顯れてるか、深く深く考へていたゞきたいのでございます。

—(終)—

伊太利俚諺

道德は何者の爲にもその手段にあらず、道徳はそれ自身に存すべき理由と價值とを有す、故にこれ人が人として生くべき唯一の進路のみ、卿等この意義を了得せば、道徳は決して我等を苦しむる所以に非ざることを解し、その實行まことに容易ならん。

大正三年四月五日印刷
大正三年四月十日發行

(定價金六拾五錢)

著作者 佐藤巖英

發行者 清水精一郎
京都市油小路御前通上ル

印刷所 弘文社
京都市北小路通新町西入

不許複製

京都市油小路御前通上ル

發行所

振替 大阪一〇八二五
東京四二一三

興教書院

電下二六六七

文學博士 井上哲次郎氏序説
文學博士 前田慧雲 師序

佐藤巖英師述

(第四版)

二宮尊徳翁と佛教

金五拾錢
小包料八錢

二宮尊徳翁の報徳主義と大乘佛教の教理と、翁が實踐躬行の成功事蹟を經緯して農會に於て講演せられしものは實に帝國國民を教養する無二の福音なり

佐藤巖英師講話

●新版

讚歎異鈔講話

言文一致かなつき
定價 金六拾五錢
小包料 八錢

本書は昨年北海道講習會に於て、現代の求道者に聖人の御信仰、聖人の御精神を紹介し、絶對他力の妙味を味ひ、眞俗二諦の根本義を、實例を挙げ、事實を示し、誰れ人にも了解する様、實地に講話せられしもの、特に附録とせし「倫理と宗教」の一篇は尤も必講を要す。

勸學 利井鮮妙師述

▲第一版

信仰清話

(肖像、絶筆寫眞入)
實價 金五拾錢
小包 金 八錢

行信教校の名は、夙に眞宗子弟の耳朶に轟き、利井老和上學徳兼備の名は、既に派内の學界に鳴れり。此の書收むる處、すべて百章言々彌陀の大悲を傳へ、句々恩海の情味を掬すべく、一讀三嘆、趣味の裡に知らず識らず、光明海中に浴するの想ひあり。本年一月和上御遺訓法話等二十章餘を増補せり無知の人も無信の人も、示寂に付、御遺訓法話悉く讀んで其の趣味に感せん。

濱口惠璋師編

●第六版

新妙好人傳

實價 金參拾五錢
小包料 八錢

本書は明治の妙好人の言行美談を集め、以て信仰に入らんとする者、既に信仰生活に住せらるゝ者の好侶伴に供せり。

佛教大學教授 文學士 羽溪了諦先生著

阿彌陀佛の信仰

新版

定價金壹圓 特價八拾五錢 小包料八錢
誰れが何と云つても古今東西阿彌陀佛ほど信者の多い佛様はないのである、現に我が國民の信仰界を眞つ二つにして其一半は確に阿彌陀佛の信仰である、人は之れを愚者の宗教だと云つて居るが試みに三千年來の佛敎史を繙いて見よ、印度支那日本宗教的偉人にして最後まで阿彌陀佛の信仰に入らなかつた人は幾人ありや修養と研究の徑路が異つては多少の同異こそあれ、七高僧已外に猶ほ數へ切れぬほど多くの阿彌陀佛信仰の高僧があつたではないか、實に阿彌陀佛の信仰は一切信仰の終局である。本編の著者羽溪學士は敬虔なる信仰生活に仕して、常に阿彌陀佛の讚仰に最も熱心なる青年學者である。本編は即ち其の讚仰的文辭の集まりである。而も書中引例の古今東西諸家の實驗的信仰は、讀者をして謂ゆる感情一偏の信仰に陥らしめず、能く智的信仰を成立せしむるの良著である。

文學博士 前田 慧雲 題辭
翠 溪道元 淨見 師編

名家の辭世

新版

定價金五拾五錢 郵税金八錢

古聖曰く「鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善」と、人は地位と名譽を棄て虚飾を脱して、赤裸々の時に於て其の本懷を顯はしたるものは「辭世」是れなり。又其の人々の風格を窺ひ知るに尤も適切にして欺かざる本性の告白は「辭世」是れなり。

本書は公卿、武人、詩歌俳人、神儒佛、賢婦遊女、力士俳優、等の名家三百名の「辭世」と小傳、逸話を輯録せり。以て修養とすべく、以て布敎の資料とすべく、以て談話の好材とすべき良書なり。

國民 一諦の發揚

金五拾五錢
郵稅八錢

今や我國世界の一等國として列強の伴に加はる、國は一等國にして、民は大國民たり、何ぞ之に適應する**自覺 自信**ありて、**窮行實踐**なかるべけんや。本書は、去る四十三四年の兩度に亘る本派本願寺臨時布教の題目即ち**民性涵養、國富増進、公德養成、風教の振興**につき、五教團の施本全部を蒐集す、以て一等國及び大國民の**特性を生育發揚**せしむるにあり。

要次目

▲信仰に立たる國民
▲大乘相應の國民
▲日本國民の性情
▲國運發展の好機
▲國民涵養の宗教
▲大國民の大宗教
▲眞宗の根本教條
▲公德養成と佛教
▲二諦相資の佛敎
▲宗教の感化事業
▲獨立の意義と事業
▲日本の文明と佛教
▲何をか公德と云ふ
▲風教の刷新と云ふ
▲他力信心の刷新
▲公德と佛教
▲眞俗二諦の事業
▲免因保護事業
▲國民と宗教
▲公德

前田 慧珠
鈴木 英藏
藤島 了法
佐藤 英藏
佐藤 英藏
八木 龍一
鈴木 龍一
曾我 大藏
日下 大藏
潮内 書記
松本 文三郎
八木 龍一
赤松 龍一
鈴木 龍一
藤島 龍一
雲山 龍一
小山 龍一
第一名 關海

高木 懺堂 師編

信仰小話

平易かなつき
金貳拾八錢
郵稅四錢

佛の御慈悲を信じたる人の言行は、一種いふべからざる難有味あり「信を得て人の喜ぶ言の葉は、かなたあらはす經陀羅尼なり」と。本書は、無我なる信仰のよすが、信者の言行の上に實現されたる、尊き難有き言行を集め、其間に聖訓、和歌若しくは編者の所感等を挟みたるものなり。新に道に入らんとする者には、親切なる指導たるべく、布教傳道者は、尤も適切にして嶄新なる教材を得べし。

梅原 眞隆 師編

先哲語錄

クロス上製四拾五錢
並製金參拾錢
郵稅四錢

本書は著者が、佛教大學に修學の傍ら、演暢院法霖師、泰通院義教師、陳善院僧樸師、明教院僧鎔師、實明院功存師の講録、法語、示談等を涉獵し、學解を離れて、出離得達の助縁となるべき、寸鐵膽を刺す語録、殆んど二百條を蒐む。斯る大徳の言行に接し、其感化を享くるは、實に信仰修養上の一大要件なり。

安田得忍師編纂

●全二冊

説教譬喻合法録 四版

●實價五十錢 郵税八錢

本書は眞諦即ち安心談の材良を主として集む再版の節勸序辨三十題増補せり
第一法説部に於て(安心)二十題の譬喻合法
第二譬説部に於て(安心)三十題の譬喻教誨
第三因縁説に於て 二十題の因縁合法
第四教誨要語部に於て 五十條の譬喻短辯
第五眞俗二諦部に於て 二十條の要文引用
第六寓意説の部に於て 十五題の面白き話
第七無常説の部に於て 十條の悲哀の要文
第八應用雜説の部に於て 二十題の法譬辯談
第九譬喻摘辨 譬喻因縁數十個條
本書は確實なる道理ある、譬喻因縁にして悉く眞俗二諦の教義に合法せるものなり

前田慧雲師題辭●安田得忍師辯述

説教三信字訓談 木版 四冊

●實價金五拾錢 郵税金六錢

本書は銘文の三信釋を讀題とし、信卷の十三通りの御字訓を。一々誰れにも能く了解し易き様。譬喻因縁を交へ他力安心の一端を詳細に説教せられしものなり。
特に眞宗三大家の説教を參考として編述したるものなれば。其説の確實なる其辯述の流暢なる未だ其比を見ず。而して每席第一序辨第二釋義、第三引例、第四餘辨と四段に分ち。以て一席の長短を自由にす。又右四段は何れの法席にも活用することを得べし。實に説教の模範とすべきの説教書也。

本山布教會編纂

布教の葉

全一冊

菊版三百三十頁
特價金五拾錢
郵税金八錢

本書は曩に本山布教會に於て左記五題について、唱導の法規と布教の材料に資すべく、派内諸名家の複案講演を編纂し非賣品として布教會員にのみ配布せられしも、有益の良書なれば、今回特に再版を乞ふて諸賢の希望に應ず。

一眞俗二諦の關係 二青年と宗教 三宗祖に對する感想
四信仰に入るの要件 五淨土教義と婦人 以上五題につきて

執筆名家

勸導	赤松連城師	文學士	山内晋卿師	准輔教	濱口惠璋師
教師	河屋哲公師	佛大講師	清原秀惠師	勸學	島地默雷師
勸學	園田宗惠師	文學士	森川智徳師	勸學	雲山龍珠師
勸學	是山惠覺師	司教	弓波瑞明師	勸學	鈴木法琛師
輔教	高木俊一師	文學士	羽溪了諦師	勸學	脇谷擔謙師
文學博士	前田慧雲師	以上十六名の卓説講演なり			

雪堂 廣瀨篤讓居士序
 榕陰 赤松連城師序
 桐陰 石村貞一居士編次

護法賢聖傳

菊版クローヌ綴
 金八拾五錢
 郵税八錢

王法佛法は車の兩輪、鳥の雙翼は古來、王侯將相の聖
 而かも佛法を信じ世道風教に裨益せらるるものを第一編に四十
 に四十八名の確實なる傳記逸事を編次、佛敎各宗大意も附録とし全一
 せられしを今回訂正増補し、尙同氏著 佛敎各宗大意も附録とし全一
 行せり。

目略

▲▲▲▲▲▲▲▲ 第一編
 桓菅藤聖天孝聖 編
 武原原武智德德
 天道謙天天天太
 皇眞足皇皇皇子
 ▲▲▲▲▲▲▲▲ 第二編
 毛楠北藤平平源 編
 等利正泰兼 重維賴
 四十八名 就成時實盛茂義

▲▲▲▲▲▲▲▲ 第一編
 豐上佐孝櫻東花 編
 臣杉々明町山園 編
 秀耀高天天天 編
 吉虎綱皇皇皇皇
 ▲▲▲▲▲▲▲▲ 第二編
 酒黒加伊德德 編
 等井田藤井川川 編
 四十八名 忠長清直光家
 勝政正孝園光康

福岡 德榮寺義溪師說教
 筑前 大久保一枝師編纂

●新版

譬諭 疫癘章說教

特價金五拾錢 小包料八錢

御文章四帖目九通に曰く「當時コノゴロコトノホカニ疫癘トテ人
 死去ス。乃コノ故ニ阿彌陀如來ノ仰セラレケルヤウハ、末代ノ凡
 夫罪業ノ我等タランモノ、罪ハイカホド深クトモ我ヲ一心ニタノ
 マン衆生ヲバ必ズスクフベシト仰セラレタリ等
 本書は說教の大家、故德榮寺義溪師生存中、天資の音聲を以て明
 辯快説能く偉大の感化を與へられたる實地の說教筆録なり。因縁
 談、合法結辯は師の尤も得意とせらるゝ所なり。殊に一席毎に序
 説、正説、譬諭因縁、合法結辯の順序とせり。

大洲鐵然師題辭
神代洞通師序文

○粟津義圭師說教

●第五版

御傳鈔講話

元名義演

實價
金五拾錢
郵稅
金八錢

此の御傳鈔上下十五段は、第三宗主覺如上人報恩謝徳の爲、當流の法義他力安心の深旨を聖人御一代の行化に寄せて讚嘆せられたるものにして、聖人滅後六百餘年の今日親鸞聖人御在世の御行狀を拜讀するを得るは、實に覺如宗主の賜なり、然れども其文簡短なれば、我々其委細を知る能はず、今此の講話は、義圭師内典外典諸書を纂涉し、聖人御化導の事蹟、開宗の模様等、細大漏すなく師の能辯博識を以て、誰れ人にも能く解する様、譬喩因縁を交へて説教せられたるものなり。

鈴木法琛師題詩 ● 弘中唯師述

金拾貳錢郵稅貳錢

桑門虛舟子編纂

金卅錢郵稅四錢

眞俗二諦講演

新撰沙石集

濱口惠璋師編

七里和上肖像

イコクタ版 ● 和上眞蹟書翰、萬行寺本堂、墓碑等寫眞九葉

定價金貳圓

七里和上言行錄

特價壹圓七拾錢 小包料拾六錢

本文かなつき
クローズ綴
全二冊函入
菊版紙數
一千百餘頁

訂正
增補

他眞俗
力諦門
教の門
の妙要
の指針
趣鑰

七里恒順和上は近世佛門の偉人、信仰界の明星也。十三回の忌辰に際して其全集として言行録新に蒐集大成せられたり身は九州の一角博多萬行寺にありて、化は普く一世に及び慕ひ來りて教を受くる者、實に幾十萬なるを知らず、和上の他力信仰に活ける一言一行は、悉く本書の内に躍如たり正に自行の明鏡にして而も利他の寶庫なり謹みて天下の江湖に薦む。

尤も完全なる實用の眞宗聖典

積徳院大谷尊由師題辭
 勸學赤松連城師跋文
 本願寺派 梵唄泰斗 澤圓諦師章譜

大眞宗 正聖典

内 容 目 次

梵唄、讚佛會	和譯入出二門偈
歡佛名、重誓偈	末消燈集
漢晉阿彌陀經	御傳息
(假名付)	口持
禮説三部經	執持
三誓偈(重誓偈)	安心決定
願生偈(論偈)	教行信義大意
十四行偈(歸三寶偈)	正信偈
念佛正信偈(文類)	御一代記開書
入出二門偈頌	和譯七祖聖教畧抄
正信念佛偈(中拍子)	眞宗法要拾遺略抄
三帖和音(中拍子)	眞宗法要拾遺略抄
念佛和音(草譜)	和譯法要拾遺略抄
帖外和音	和譯法要拾遺略抄
御文章(佛文)	興一箇條起請文
夏御文(佛文)	離山の御書
御文章(佛文)	田植の御歌
領解文(改悔文)	御眞影の御狀
報恩講式	御眞影の御狀
御傳三寶經	御眞影の御狀
和譯三寶經	御眞影の御狀
和譯教行信證	御眞影の御狀
和譯文類聚抄	御眞影の御狀

製本 縦五寸 横三寸六分 舶來上等紙 全文總かなつき

特 本金欄三方金函入 金膏四拾錢 總皮三方金函入 金膏貳拾錢 クロス製函入金八拾錢

價内地小包料各金八錢宛 清國、朝鮮、臺灣、樺太各金三錢

終